

第4章

研究開発にかかわる取り組み

海外派遣および受け入れ

海外派遣

本年度も、コロナ禍の中で、すべての中短期プログラムがオンライン化され、実際に現地に訪問する取り組みができませんでした。一部の派遣プログラムは、日本文化探求プログラムに置き換えました。長期派遣については、次のような形で実施できました。

・IM コース長期留学

IM コース（2 クラス）は、生徒全員が1年間留学するカリキュラムで、1 クラスは1年の9月から2年の6月までカナダに、もうひとクラスは1年の1月から12月までオセアニアに留学するのが、通常期のスケジュールです。

コロナ禍において、2020 年度に出発する予定であった生徒は、2020 年度中に出発の見込みが立ちませんでした。オーストラリア、ニュージーランドともにビザの発給がストップもしくは発給までの時間が長くなるため、全員の行き先をカナダに変更して、2021 年5月から留学を実施しました（オセアニアを予定していたクラスは7月出発）。これらの生徒は3月14日に帰国しました。

2021 年度の1年生は、2 クラス全員が2022 年4月3日に出発予定です。

・Global Challenge Program (GCP)

教育後援会の支援を受けての海外派遣も実施できませんでしたが、日本文化を知る企画に変更し、今後の交流に備えることとしました。詳しくは次項 Global Challenge Program のページをご覧ください。

海外受入

本年度もアジア架け橋プロジェクトの生徒のみの受け入れとなりました。パキスタンとネパールからの合計2名を10月より受け入れました。2名は、Global Youth Fair SURVIVE への参加など、積極的にWWLの活動に参加しました。

それ以外の受け入れは、残念ながら実現できませんでしたが、オンラインでの交流を企画し、メキシコ学院とはオンライン交流が行われました。その他の学校とは、ロックダウンなどの関係で、予定が突然キャンセルされたり、予定自体が立たなかったりと、未だ実現が難しい状況にありました。

Global Challenge Program

Global Challenge Program (GCP) は、イニシエーション型の海外研修として計画されてきたもので、台湾・香港・ブータンなど、アジア地域を中心に様々な国・地域に生徒を派遣してきました。昨年度はオンライン中心に行っていましたが、本年度は、国内での対面の取り組みが制限付きではありますができるようになってきたため、日本文化再発見をテーマに3つのプログラムを実施してきました。3つの企画は(1)能, (2)京菓子, (3)着物です。実施したプログラムについて、紹介します。

<Know 能 now!!>

様々な日本文化が色濃い京都で改めて自国の文化を学ぶということは非常に新鮮であり、目を向ければ日常でも身の回りに多くの伝統文化があることを再認識させられました。このプログラムは能について学び鑑賞することを目的として、本校在校の味方さんに焦点をあてましたが、当日の「小鍛冶」では本校在学中の他の高校生が同じく能を演じ、また本校在学中の中学生が小鼓で、本校卒業生が大鼓で出演するなど身近に伝統文化を受け継ぐ人たちがいることを知り、感銘を受けるとともに能を身近に感じることができました。

今回事前学習で様々な視点から能について知り、実際の演目を同じ学校に通う生徒が演じ演奏する姿を見ることができたことでより深く日本の独自の文化を味わうことができました。この興味関心が今後さらに様々な自国の文化を知ることへつながることを願います。



10月25日(月) 事前研修①(本校メディア1教室ZOOMにて)

味方玄様(2011年重要無形文化財(総合)に認定)ご講演
能の歴史、舞台、能面についてそれぞれの特徴や工夫されていることなどについて学ぶとともに、「風姿花伝」を一緒に読み進めて芸能を極めていく生き方について理解を深めた。



10月28日（土） 事前研修②（本校メディア1教室にて）

本校高校2年生の味方梓さんによる能に関する学習

「小鍛冶」をはじめ様々な演目の紹介や見どころを聞く。また、実際の舞台、道具、囃子のそれぞれの細やかな作りや意味や工夫について詳細に学んだ。幼少期から能の世界で生きてきた中での体験談やこれからの目標や彼女が思う能の魅力についても知った。



11月6日（土） 本番（京都観世会館にて）

味方梓さんの初面となる舞台、「小鍛冶」を鑑賞。
迫力ある演技に圧倒された。



事前学習と舞台鑑賞で学んだことや感想などをグループでスライドにまとめ、学術際でオンライン公開した。スライドのQRは以下。



能の音楽、囃子



能の舞台のつくりと工夫



風姿花伝



様々な能面

<作って、食べて、知って京菓子をとことん追求>

生徒10人が参加しました。

京菓子の奥深さと魅力を知り、テーマに沿ったオリジナル京菓子をデザインするのがプログラム内容です。有斐斎弘道館では毎年、京菓子展が開催されています。今年のテーマ「手のひら自然―徒然草 2021」に沿ってデザイン画を作成しました。

□プログラムの目的

- ・和菓子の魅力、奥深さを知る
- ・日本文化を再発見

□プログラムの特徴

「五感」を使う

・作る ・創る ・味わう（食す、鑑賞する） ・感じる ・聴く（菓子銘）

□プログラムの内容

1. 京菓子展に和菓子のデザイン画を出品
2. 和菓子を知る
①専門家による講座 ②和菓子作り体験
3. デザインを考える
①デザイン画作成の講座（熊本先生） ②徒然草の舞台「仁和寺」訪問
4. 京菓子展の鑑賞（弘道館）

□スケジュール

- | | |
|--------|------------------------|
| 10月15日 | 京菓子についての講義 |
| 10月18日 | 京菓子デザイン画考案に向けての講座 |
| 10月24日 | 仁和寺訪問、「老松」にて京菓子作り体験 |
| 10月29日 | 出品デザイン画の発表会と講評 |
| 11月06日 | 弘道館にて「京菓子展」見学、お茶会参加、表彰 |

□取り組み内容

10月15日

京都老舗銘菓「老松」当主太田達様と弘道館館長の濱崎加奈子様による講座では、京菓子について、お菓子の起源に始まり、お茶席での京菓子の持つ意味、京菓子は五感で堪能するなどさまざまな角度からお話し頂きました。

10月18日

オリジナル京菓子をデザインするにあたり、本校美術教員による講座を実施しました。菓銘とデザインの結びつきや、表現者と客の立場でのデザイン構成について、さらに、テーマの徒然草の概要を学びました。

10月24日

・徒然草には仁和寺を舞台にした段がいくつか収められ、作者と縁(ゆかり)があるので仁和寺を訪れました。住職による徒然草とのゆかり、仁和寺の歴史などの講義を受けたのち、境内を案内して頂きました。

・有職菓子御調進所 老松にて工房見学と京菓子作り体験をし、京菓子講座を受講しました。実際に京菓子を作ることで、形成の仕方、素材や色の出し方など新しい気付きの機会となりました。

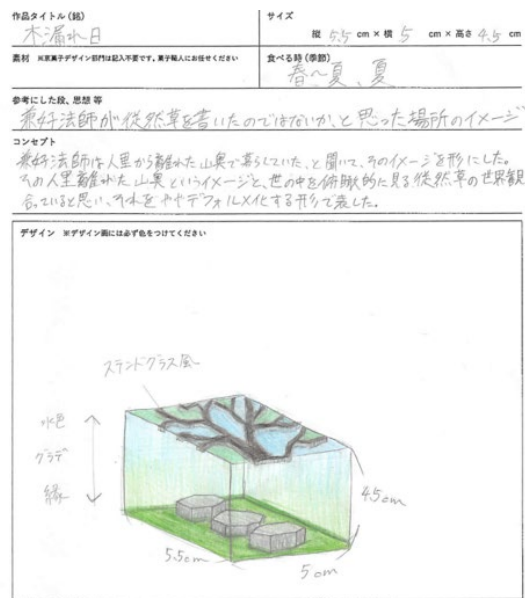
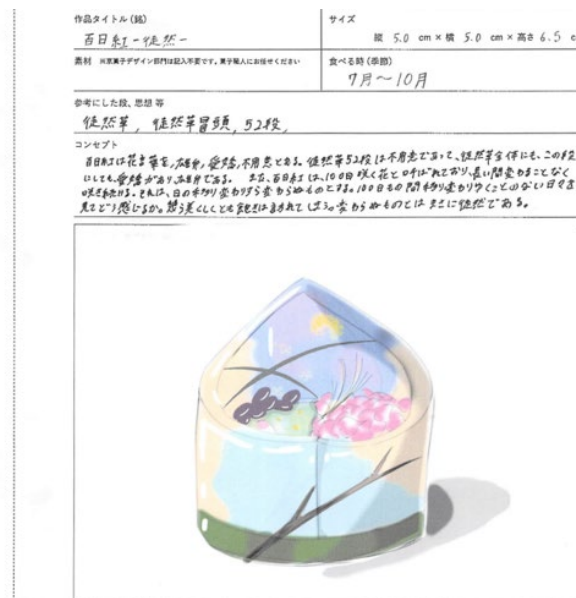
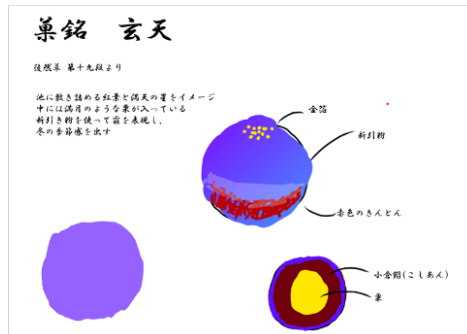


10月27日

デザイン画作成の途中経過を共有する時間を作りました。

10月29日

完成したデザイン画の発表会をしました。徒然草のどの段から着想を得て、そこからどんなメッセージを伝えたいか、それを京菓子としてどのように形成、表現したいかを発表しました。最後に美術教員より講評してもらいました。



11月6日

有斐斎弘道館にて開催中の京菓子展を見学しました。お軸や生け花を鑑賞しながら優秀作品の京菓子とお茶を頂き、「一期一会」のお茶席を堪能させて頂きました。また、老松当主よりデザイン画の講評を頂き、優秀賞が発表されました。数寄屋建築の会場には入選作品 35 点が展示されており、趣向を凝らした作品を鑑賞しました。

京菓子の魅力や奥深さを学ぶことを通して日本文化の素晴らしさを体感できる機会となりました。

今回の取り組みの一端を THE KYOTO にて紹介して頂きました。

https://the.kyoto/article/kyogasi_workshop



<生徒の感想>

・今回のプログラムを通じて京菓子の役割や歴史、作り方を学べてとても貴重な機会だった。特に自分で和菓子のデザインを考えるのは少し難しかったが、初めてのことでごくワクワクしたし、また機会があればデザインを考えてみたいし、プログラムに参加したいと思う。

・普段触れる情報や知識としての日本文化ではなく、文化の根底にある思想やその歴史的背景について学べたことがよかった。また、茶道や日本庭園など、京菓子に関連する文化にも触れたことで、その他の文化に対する興味も深まった。

・今回の和菓子の GCP では自分は和菓子の材料、食べ方、ビジュアル的工夫については一般的に流布している知識程度には知っていたが、和菓子の原型、成り立ち、調理方法とその理由など一歩踏み込んだ領域まで知ることができた。

<着物を普段着に>

日本文化探究企画第3弾として、「着物」に焦点を当てたプログラムを実施しました。このプログラムでは、これまで私達の生活を支えてきた「衣食住」に関する日本の伝統文化を深く掘り下げ、先人の知恵を学びながら、魅力を再発見することを目指しました。今でこそ「洋服」に対して「和服」と呼びますが、洋服が登場するまでは、「着物＝着るもの」と呼ばれ、その歴史は洋服文化のそれより遥かに長く、1200年以上受け継がれた日本人のアイデンティティの象徴の一つと言えます。この日本人にとって身近な存在であるはずの着物が、外国人にその素晴らしさを評価される一方、近年、着物人口が減少するに乘じ、着物に関わる様々な業種や職人の数が減少しています。このまま着物人口が減少し続けると、近い将来、日本には着物の作り手が不在となり、生活基盤である衣食住の「衣」が消滅することになります。この現状に歯止めをかけるために、次世代へつなげることの責任と意義を痛感し、今回、この企画を実施するに至りました。また、本校は、着物産業が栄えた京都に立地するので、この地理的に恵まれた環境を最大限に活かせると考えました。

少しでも着物を身近に感じ、その魅力を知って、装う機会を増やして欲しいと考え、2
段構えの企画設定 1) 着物について学ぶ 2) 着付けを習得する をしました。着
物を着る楽しみを実感してもらうために、最終目標として宇治散策とお茶席参加を盛り
込みました。プログラムを実施して気付いたことは、「日本文化探究」は STEAM 教育で
あり、今後発展させるべき可能性を大いに含んでいることです。
以下がプログラム内容です。

□プログラムの目的

- ・着物の魅力を知って、着物を身近な装いにする
- ・日本の伝統文化を再発見する

□プログラムの特徴

「五感」を使う 着物を着てゆったりした気持ちで

- ・聴く 着物の絹など素材の音、帯を締める時の音、草履で歩く音
- ・見る 糸、生地、着物や帯の文様・色合い、小物、装う姿を見る
- ・触る 糸、生地、着物、帯などの感触、風合い
- ・話す 友禅、西陣、丹後ちりめん、紬など着物の名称、着物姿の表現
- ・香り 着物や帯が醸し出す香り（おばあちゃんの家など）

□プログラムの内容

1. 着付けを習得する
2. 着物いろいろ（しきたり着物・普段着物、製作工程、素材）
3. 京都で栄えた着物産業 ～支える職人から学ぶ～
4. 着物姿で宇治を散策する

□参加生徒 9人 + 留学生2人

□スケジュール・内容

2月08日（火） 着物について学ぶ

本校の美術教員（熊本教諭）と企画者（武部）による着物講座を実施しました。

①着物の格、装う場面や相手、季節により着物の種類は様々であること、また、その素材や柄も多様であることを学びました。

②着物や帯が出来る工程（蚕が真綿、生糸になり、染められ、図案化され織り上げるまで）を学びました。

③様々な種類の着物（袷・単衣・訪問着・無地・付下げ・紬・お召し・小紋・ウール・木綿・紗・絹）と帯（袋帯・名古屋九寸帯・八寸帯・塩瀬）、羽織、道行、小物（帯揚げ・帯締め）などを実際に見たり、触ったりして感触を確かめました。

④反物がどのように着物に仕立てられるか、また柄合わせはどうやるのかを理解するために、「紙で着物を作る」体験をしました。着物は解くと何度も仕立て直せるし、裁断方法に無駄がなく、破棄する部分がゼロのサステナビリティの高い衣であり、蚕などの自然の恵みへの敬意の現れであることを学びました。



2月15日（火） オンラインで丹後ちりめん工房訪問

株式会社「和える」のサポートにより、丹後ちりめん「柴田織物」をオンライン訪問しました。和えるの中川様がファシリテーターとなり、柴田織物の柴田様から丹後ちりめんの歴史、丹後ちりめんの特徴、丹後ちりめんが出来る工程をお話頂きました。蚕の生態、蚕から絹になるまでの過程や、生糸、絹の特性を学び、さらには織り上げる工程などを事前に送って頂いた「紋紙」を手に取りながら学ぶ様子は、生物や情報の授業内容を彷彿とさせました。織り上げた丹後ちりめんの商品を拝見し、絹の光沢やしなやかさは画面を通して伝わりました。

2月17日（木）18日（金）3月07日（月）11日（金）12日（土）着付け講座
講座全5回

着付け講師による着付けを習得する機会を5回設定しました。着物に関しては、家庭に着物がある生徒は持参し、ない生徒は「京都和装財団」より無料でレンタルさせて頂きました。着付けのできる本校教員がサポートも加わり、各回2時間を超す講座となりましたが、参加生徒は汗だくになりながら必死になって着付けを練習し、名古屋帯を自分で結べるようになりました。



3月04日（金） 西陣織会館訪問、工房訪問 「おおば帯」、「都帯」

①西陣織会館にて、機織りの体験をしました。ジャガード織機などの織機で経糸と緯糸が織られる仕組みを理解することは至難で、実際に体験することで理解が深まると考え、このプログラムを盛り込みました。体験後は、繭を紡いで生糸にする工程や、ジャガード織を使って機織りする様子、西陣爪搔本綴織の様子などを見学し、たくさんの質問をしました。



②「おおば帯」の会社を訪問し、社長の太庭様より「西陣帯」について講義をして頂きました。日ごろ目にすることのない、様々な種類や色の絹糸や、デザイン画など織るまでの工程にまつわるたくさんの実物や、数々の色彩豊かな「おおばの帯」を手にとって拝見させて頂きました。また、西陣だけでなく、着物業界全体の抱える課題、現状についても考える機会となりました。



③「都帯」の会社を訪問し、会長の倉田様のご案内のもと、手織り職人さんの作業の様子を見学させて頂きました。40 年以上携わっておられる職人さんの手さばきを拝見しながら、経糸と緯糸の仕組みを解説して頂きました。同時にこの職人さんがこちらで唯一の方となり、職人不足、後継者不足が切迫した課題であることを目の当たりにしました。工房見学のアとは、社屋にて展示している「都の帯」の数々を拝見させて頂きました。



3 月 12 日 (土)

お全員、無事に着付けをし、予定通りお茶席に参加することができました。当日は、この時期には珍しい 20 度近い陽気に恵まれ、散策には最高の日となりました。大庭社長が着物を着る楽しみは 3 つあるお話されましたが、その通り、1) 着る楽しみ 2) 見られる楽しみ 3) 着物を見る楽しみがありました。



【生徒の感想抜粋】

・帯の製作過程や西陣織全体の現状など、どれも興味深く、勉強になりました。伝統工芸品を作ることが出来る人が少なくなっている中で、何故残していけるのか、多くの工夫が勉強になりました。私の祖父は清水焼の絵付けをしているのですが、こちらの業界も後継者不足が現状なので、今回の学びをうまく活用し、私も何らかの形で力になりたいと強く思えました。まだ学生で稼いでいるわけではないので帯は買えませんが、いつか自分の稼いだお金で帯を仕立ててもらえるように頑張っていこうと思います。また、その素晴らしい帯が似合う人になりたいと思いました。

・コロナ禍にも関わらず、実際に帯に触れたり、貴重な経験をさせて頂き嬉しく思います。帯が出来までの工程は、想像をはるかに超えていて驚きました。多くの職人さんの手によってつくられていることを改めて感じ、祖母や親せきから受け付いだ着物や帯を大切にしようと思いました。

・コロナ禍にも関わらず、実際に職人さんが帯を織る姿を見ることができて良かったです。完成図を見ながら糸の色を見分けて織っている様子はすごいなと感じました。職人さんの中では 60 歳などまだまだ若手で 80 過ぎまで現役ということに驚きました。伝統を受け継ぐ後継者不足という課題を改めて知って、私も将来何かを引きついでいけるような仕事に就きたいと強く感じました。

・zoom で工房を見学させて頂き、画面越しでしたが、丹後ちりめんの魅力や特徴がよくわかりました。特にシルクの説明でお話していた「とろーんとしてて、肌に吸い付くような」という感触について、実際に自分が着物を着た時にその実感ができました。シルクの柔らかな風合いに魅了されました。工房で見せて頂いた織機の経糸の本数が 3700 本ということに驚きました。また、フロッピーがない時代は図案が紙でできていたことに関して、そんな伝統が今にも繋がっていると感じると本当にすごいことだと感じました。

・柄を決めることから糸染、織る、そして売る、すべての工程を考えると多くの人の手によって繋がってひとつのものができるところを改めて感じて、ものを大事にしようと思いました。

・夏に着る帯は向こうが透けるほど薄くて、季節に合わせて昔から着こなしていたんだと思いました。帯ができるまでに、たくさんの工程があって、たくさんの人が協力してはじめてできあがるということです。1つの場所で一人で仕上げるのが機械化などでは多くなってきた現代から考えるととても複雑で大変だと思います。しかし、そのたくさんの手加わったからこそ、職人たちの想いが込められていると思いました。

・短い時間でしたが、帯について知れば知るほど、どんどん疑問点や興味が湧いてきてすっかりはまってしまいました。西陣の歴史的な背景を知ることによって変化を感じ取り、時代とともに数が減少していることが悲しかったです。日本が昔から続けてきた織物の歴史を途切れさせてしまうかは、私達に責任があると思いました。私は将来、こういう日本文化を日本や世界に発信していく架け橋になることが夢です。

<まとめ>

今回、企画名として「日本文化探究」と明確に提示したことで、これまでの取り組みでは出来なかった深く掘り下げて学び、体験する機会を設けることができました。また、生徒も本校の姿勢に乗じてか、日本国内より先に海外に目を向ける傾向があることや、教員自身が自国の文化についての知識、教養不足であることが浮き彫りとなりました。この企画の実施を受けて、本校教員からも同様の意見があり、授業などでも積極的に取り入れるなど、今後、新たな形で自国文化理解の発展が見込めると考えます。

また、各企画の実施を通して、「日本文化探究」はSTEAM教育の宝庫であることを認識しました。例えば、着物企画では、理科分野として蚕の生態、桑の葉、シルクの特徴、情報・数学分野として織機の経糸、緯糸の仕組み、紋紙（プログラミング）、保健体育として身体のことを考えられた着物の作り、脳活性化する草履と足袋など一つの伝統文化について、全教科にわたり学習することができます。後継者不足により作り手や技術の継承が課題となる中、学校教育を通して、その価値を認識すると同時に自国の伝統文化を身近なものにできると考えます。また、伝統文化STEAM教育が地域の活性化やロハスにつながる可能性があると考えます。

歴史ある伝統文化が後継者不足のため、作り手や技術の継承が途絶える可能性が現実となっています。何世代にもわたって受け継がれた技術が途絶えることは、アイデンティティの喪失をもたらします。若い世代が自国の（伝統）文化を知らないことは、学ぶ機会、知る機会を与えていない大人の責任です。学校教育の現場が、それらを食い止めるために果たす役割は大きいと考えます。そして、私達大人は、次世代へ長年受け継がれた文化を継承する担い手であり、その責任があることを痛感しました。

コロナ禍により留学生の来日が難しい中、本校へ留学した生徒が参加し、日本文化を学ぶ機会として好意的に受け止められました。今後の国際センターの方向性として、「日本文化探究」を留学生受け入れ拡大に向けて打ち出すことを検討したいです。

国際委員会の取り組み強化

国際的な活動のすそ野を広げるために、国際委員会の取り組みを強化しました。

国際委員会は、本校の国際センターが主管する生徒の委員会活動で、対外的には国際ロータリーのインターアクトクラブとして京都洛東ロータリークラブから支援を受けて活動しています。インターアクトクラブとしての活動は、ロータリーの「超我の奉仕」を学び、行動力を身につけるというもので、以下を目標としています。

- ・学校や地元地域でボランティア活動をする
- ・異文化について学び、国際親善に貢献する
- ・学校や地元地域でリーダーシップを発揮する
- ・楽しみながら、世界中に友だちをつくる

インターアクトクラブについては

<https://www.rotary.org/ja/get-involved/interact-clubs> をご覧ください。

インターアクトクラブでは、年間2回以上のプロジェクトを実施することになっていきます。また、ロータリークラブの企画する研修会や研究会、講演会などに参加することができます。これらの活動を校内の委員会活動とともに行う形にしており、例年の活動は、

- ・来校する留学生のお世話
- ・興風祭（文化祭）での活動紹介や留学生の国の文化の紹介
- ・公益財団法人国際センターのダルニー奨学金への協力

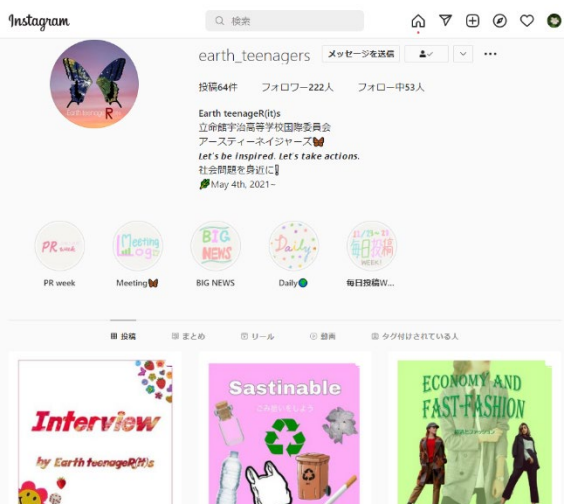
などです。

コロナ禍において、留学生の減少、街頭募金活動ができないなど、活動が制限されたにもかかわらず、自分たちの手で何かを始めたいという気持ちが高まり、本年度は以下のような新しい取り組みが始まりました。

<Earth teenagerR(it)s>

様々な活動をする中で、若い世代の意識を変え、学校や家庭でも SDGs をはじめとした課題を話すことが大事であると感じた生徒たちが、自分たちが学んだことや体験したことを広く共有する仕組みを作りたいと考え、活動を開始しました。それが、Earth teenagerR(it)s です。teenager の R が大文字なのは、立命館の Rits を挟み込んで名称としたためです。

様々な課題解決の取り組みにおいて、正しい情報を共有し、課題に関心を寄せてもらうための発信が必要と結論付けられることがあります。それを行動に移して、



継続させていくところまでできる例は多くありません。今回の取り組みは、国際委員会で代々引き継いでいくことも目標としており、次年度への体制作りも行われている点が特筆すべき点かもしれません。また、外部に活動を広く知ってもらうために、コンテストや公募に応募するなども取り組んでおり、以下のような成果もあげています。

○アースデイ東京主催「第一回環境アイディアコンペティション」

斬新なアイディア賞：Earth teenagerR(it)s：前例がなく、多くの人が参加しやすいユニークかつ効果的なアイディアを発表。

アイディア名：おすそわけセッション

SDGs：8, 働きがいも経済成長も

課題意識：家庭で過ごす時間を短くする飲み会のメリットだけ残したい

原因の仮説：先生にヒアリングしたところ、飲み会は、断りにくい、参加すると人と繋がれたり悩み相談ができるなどのメリットもある

アイディア概要：専用の自販機でお菓子や飲み物を買うと容器が二つ出てきて大人でも自然に「分けない？」と誘いやすくなる



○ELLEgirl UNI ELLEgirl NextLAB

「オードリー・タンさんと考えよう！ デジタルの力で環境問題を解決する方法」

テーマ：デジタル技術を活用して環境問題を解決する方法

学生がメインとなり環境問題に取り組んでいる、かつ英語でのプレゼンテーションが可能な学生団体が対象で、EarthteenagerR(it)s の取り組みを紹介し、見事オードリー・タンさんとの単独会見を実現しました。

<海外の学校とのオンライン交流>

コロナ禍で行き来がストップしている海外連携校との交流を、オンラインで始めました。詳しくは、○ページをご覧ください。

<留学生とともに学園祭(興風祭)でチャリティー物品販売>

コロナ禍で従来行っていた募金活動ができなくなり、学園祭において、留学生の出身国の食品などを販売し、収益を『ダルニー募金』(東南アジアの生徒向け奨学金)に協力(寄付)することにしました。継続してきた寄付を打ち切ると、現地の生徒の奨学金も打ち切りになってしまうため、留学生の国の文化を知る取

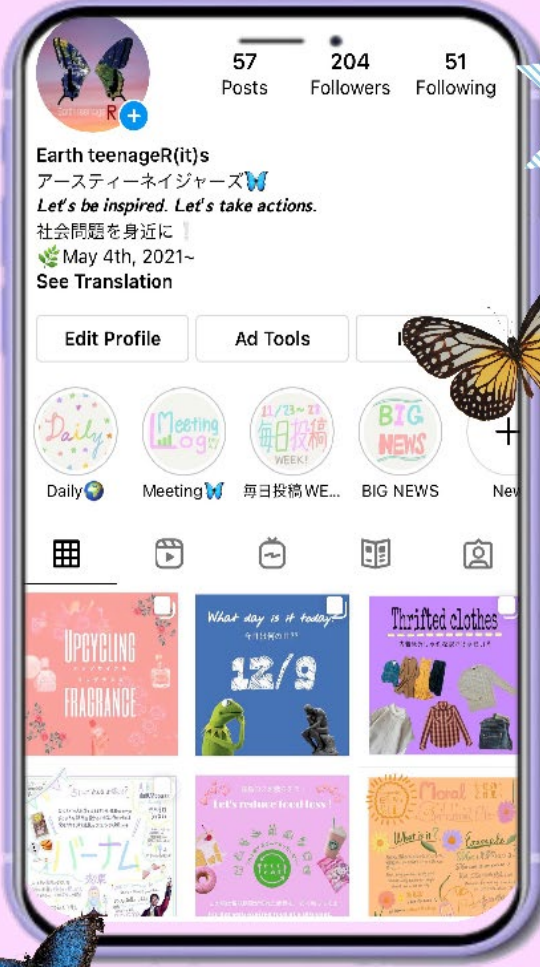


り組みとともに、収益を寄付するという2つの性質を持つ取り組みにできました。留学生おすすめの商品をそろえたため、予想以上の反響で、仕入れたものは完売できました。

参考資料 Earth teenageR(it)s インスタグラムのフォロー呼びかけポスター(フォローお願いします)。

Earth teenageR(it)s

国際委員の活動として、何か生徒主体で始めようと思ったのがEarth teenageR(it)sが始まったきっかけ。teenagersにとっつきにくい社会問題をSNSを通して、可愛いお洒落なデザインから知ってもらい、アクションを一緒に解決していきたいという思いから発足しました！



How to share our voices?

主に発信しているappはInstagram。メンバー全員でデザインを考えたり、日英両言語でキャプションを考え、発信をしています。これからは、インタビューなどの新しい企画を発信していく予定。

ぜひInstagramのフォローをよろしくお願いします！

Please check and follow our Instagram!!



EARTH-TEENAGERS

生徒たちは、独自に清掃活動を行いその記録をアップするなど、活動自体も活発になりました。

WWL 連携校とオンラインラオス研修を開催しました

1. オンラインラオス研修の経緯と目的

立命館宇治高等学校では 2015 年からラオスに渡航しての現地研修・視察を行なってきました。2020 年度に新型コロナウイルス感染症が発生・拡大したことで、現地に渡航しての研修ができなくなりました。コロナ禍になり 2 年が経過しましたが、昨年度に続き、本年度もオンラインで実施をしました。

ラオスにおいてもコロナの影響で学校が閉鎖されたり、人の往来が制限されたりなど様々な場面で苦難が続いています。そのような中でも、現地の様子を直接感じとる貴重な機会として、下記の目的で実施しています。

- ・ 高校生がラオスの様子をよりリアルに感じ取り、ラオスの文化を感じ興味を持つと同時に、ラオスの課題についても感じ取り、自分がアクションを起こすきっかけとする。
- ・ 立命館宇治 IM コースの生徒が実施してきたプロジェクトの報告や実践の場とし、この研修を通して国際協力を加速する。

2. 参加者数及び参加校

今年度の参加者数は 23 名、参加校数は下記の 6 校でした。

明石工業高等専門学校・大妻中野高等学校・福岡雙葉高等学校・宮崎県立飯野高等学校・名城大学附属高等学校・立命館宇治高等学校

3. オンライン研修実施形態・環境など

a 実施団体 支援団体

アイ・シー・ネット 株式会社：<https://www.icnet.co.jp/>

アイ・シー・ネット株式会社はラオスのような途上国の社会課題解決、社会開発を専門とする開発コンサルティング企業です。今回の研修全体の企画・進行・現地スタッフとの調整をしていただきました。

PTP company limited：<https://www.ptp-laos.com/>

PTP はラオスでビジネスを始めたい人へのコンサルティング業務、ラオスでビジネス体験をしたい学生へのインターン紹介、ラオスを知りたい人へのツアー業務などを行なっています。アイ・シー・ネットと連携し、現地に駐在する日本人スタッフの方にラオスの様子をレポートしていただいたり、ラオスの方との交流の翻訳をしていただいたりしました。

NGO クアトロ：<https://ngoquatro.org/>

PTP と連携しながら、ラオスの若者の高校就学を支援している特定非営利活動法人です。ラオスに坂雲寮という学生寮を作り、運営しています。本校のプロジェクトで得られた支援金はこの活動に当てられます。

b 接続方法・使用ソフト

ZOOM : <https://explore.zoom.us/ja/products/meetings/>

現地のスタッフが ZOOM で日本と接続し、リアルタイムでラオスのレポートや現地のラオス人との交流を行ないました。南部の町、パクセと北部の首都ビエンチャンを瞬時に切り替えて研修を実施するなどのアレンジが可能となりました。

Slack : <https://slack.com/intl/ja-jp/>

研修の細かい情報の共有や振り返り、事前学習の共有などに活用して実施しました。無料で使用でき、目的別にチャンネルを使い分けることが可能であるなど、オンライン研修を進めるために非常に便利なツールとなりました。

Kahoot : <https://kahoot.com/>

現地の高校生と交流の中で、クイズを実施する際に活用しました。

4. スケジュール

全体スケジュールの概要

ラオス研修は下記のスケジュールで実施しました。

事前研修 1月6日(木)	オリエンテーション	国内の参加者全員で集まり、自己紹介！事前学習の発表と、簡単なラオス語をみんなで覚えて、少しでも海外研修中に使えるようになりましょう！
海外研修DAY 1 1月8日(土)	市場探検・ 現地高校生との交流	ラオスの文化・生活を知るために、ラオス最大級の市場を探検！ そのあと、同世代のラオスの高校生と異文化コミュニケーションにチャレンジ！
海外研修DAY 2 1月10日(祝・月)	伝統工芸品の 村を訪問	オンラインで伝統的な方法で竹細工を作る村を訪問。伝統工芸品がどのようにつくられ、彼らの生活に根付いているか、村の様子を見たり、村の方にインタビューしながら理解しよう！
海外研修DAY 3 1月15日(土)	コーヒー農園訪問 ビエンチャン視察	ラオスには有名なコーヒー産地があります。産地へ行き、コーヒー農家にお会いしましょう。ラオスのコーヒー農家支援を目的としたチームが現地のコーヒー農家さんとお話する予定です。 この日は首都ビエンチャンとも繋ぎ、ラオス南部との違いも発見しましょう。
事後研修 1月23日(日)	振り返り	ここまでの学びを振り返り、今後のそれぞれの活動につなげましょう。

5. 活動記録

<事前学習>

事前研修では、1 ラオス語講座:挨拶と自己紹介 2 今までの研修から生まれたプロジェクト紹介 3 調べ学習の発表(グループに 分かれて) 4 Slack の使い方 4 まとめ、が行われました。調べ学習の発表では、初めて顔を合わせる他校の生徒がいる状態での発言は出にくい状態でしたが、本校の生徒がうまくファシリテーターとしながら、グループ内において連帯感が生まれてきました。調べ学習の内容の共有によって、ラオスの概要がつかめてきたようでした。

<1日目>

研修の最初には、前回の事前研修で学んだラオス語をもう一度復習をし、研修をスタートさせました。この日からは、いよいよラオスに直接接続をし、現地の雰囲気を感じながら研修を開始しました。Zoom を使って、現地と接続をしましたが、画像も十分綺麗に映す事が出来ました。前半は、ラオス最大級の市場探検をし、ラオ

スの食材や日用品を見学しました。現地では日本人のスタッフが日本語でアテンドしてくれたた為、非常にわかりやすく、日本との違いもしっかりと感ずることができました。後半は、現地の高校生との交流会を実施しました。日本人生徒は Kahoot を利用し、オンラインで日本文化についてのクイズをしながら、日本文化紹介を行いました。オンラインでも文化理解と良い交流ができました。

<2 日目>

本日の研修で最初に訪れたのは、ボラベン高原という場所にあるソンプンさんのコーヒー農園でした。ソンプンさんは本校がラオス渡航した初期の段階からお付き合いのある方で、有機農法にこだわってラオスコーヒーを栽培されてきた方です。インタビューの中では、今年はラオスコーヒーが凶作であること、また有機農法は農薬や化学肥料を使った栽培方法よりも、生育速度も遅く、手にかかるため大変であることを教えていただきました。



次に、ZOOM はビエンチャン飛び、ビエンチャンのショッピングモールの様子を別の PTP の方に紹介していただきました。のどかで、素朴な印象を持った南部のパクセーや農村部とは一転し、開発が進んだ綺麗な街並みやショッピングモール、高層マンションが立ち並ぶ様子に驚きました。ショッピングモールでは、



は、ラオスの富裕層向けの商品が販売されており、物価が農村部とは全く異なることや、外国資本がたくさん入ってきながら、急激に発展している様子が伝わりました。ラオスの変化の速度が日本などの先進国とは全く異なることを感じました。

最後に、再びボラベン高原に戻りコーヒー組合のカフェで働かれているタオさんにインタビューを行いました。ラオさんはコーヒー農家に生まれ、ラオスコーヒーに対する情熱を持ちながら、ラオスコーヒーの品質向上や普及に努力をされています。この地域では 450 個の小さな農家が集まって組合を構成しているそうですが、知識面・技術面などまだまだの部分があり、世界的な評価は発展途上にあるとのこと。タオさんは 450 個の農家が協力し、ラオスコーヒーの品質向上を目指すための教育などにも携わっており、世界的な評価よりも、地域の協力・連携を重視しながら奮闘されていました。



振り返りでは、「都市部と農村部の経済格差、収入の違いがスーパーマーケット

の商品の値段や交通や風景からとても大きいものなんだと改めて感じました。」「コーヒーづくりでは、農家さんたちのできるだけおいしいコーヒーを作ろう、クオリティの高いものを作ろうという熱意を強く感じました。」など多くの学びを得ている様子が伝わってきました。

<3日目>

ラオスに接続する最後の日には、竹細工村に訪問をしました。この村は、実際に坂雲寮に住んでいる生徒の出身村になります。生徒たちがどのような村から来ているのかを学ぶことができました。村では、竹細工作成方法を見学し、生産者に、竹細工の魅力や課題などをインタビューしました。ラオスでは、ご飯を持ち運ぶ時などに竹細工を使うので、非常に貴重な文化になっているようでした。また、村の生活や一般的な家庭の生活や様子をインタビューと共に聞くことができました。

<事後学習>

最終日には、学んだことの棚卸しとして、それぞれの学びを3分～5分のスライドにまとめて発表を行いました。それぞれの生徒が非常に高い志を持って振り返りを行ってくれました。下記にその一部を抜粋します。

・立命館宇治高校1年生

一番印象に残ったのは日本の商品がたくさんラオスで売られていたこと。ラオスの人は味の素をたくさん料理に使うと聞いてラオスを身近に感じた。ラオスを身近に感じたことでラオスの問題を解決したいとも思った。ラオスのコーヒープロジェクトにも絶対に参加したいと思った！

・飯野高校1年生

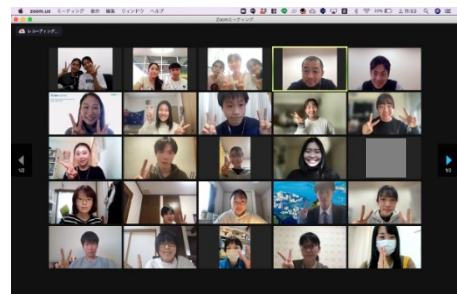
自分が学校でやっているイエメン支援のコーヒー販売に学んだことをつなげたいと思い参加した。ラオスは発展途上国だから日本より遅れている印象があったが、男女格差指数では日本の方が遅れていることを知り、発展途上国だから遅れているというステレオタイプな見方がなくなった。コーヒー農家さんの生産物には生産者の思いが詰まっているから、大切にしたいと思った。

・明石工業高等専門学校2年生

発展途上国に興味があって、メールに反応して参加してみた。経済格差があり教育や医療に富裕層と貧困層の差があることにショックとともに問題を感じた。一方で、学校に行きたいという思いが強い若者の意欲にも印象に残った。父がコーヒーの仕事をしているため、ラオスコーヒーには興味を持った。ラオスコーヒーはブランドが高いわけでもないけど、ラオスの農村の人々の努力には感銘を受けた。

・立命館宇治高校3年生

まずは、この様な機会を設けてくれた全ての人に感謝をしたい。プット君はじめ多くの生徒が非常に親日でとても嬉しかった一方で、農園のソンブンさんが体調を崩されていて心配になった。人の顔や気持ちが見えることで、ますます頑張りたいと思った。



6. 到達点と課題

昨年度に引き続き、オンラインでのラオス研修となりましたが、参加者の振り返りからも分かるように、オンラインであっても貴重な学びの経験となりました。特に下記の点について到達できました。

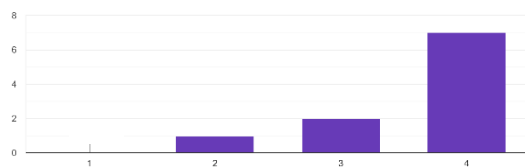
- インターネットで調べるだけでは得られない情報に触れることができる。
例) ラオスの高校生の日本へのイメージが非常に良いこと。ビエンチャンでは大きなショッピングモールができていること。ラオスの人々は子供に名前と同時にあだ名までつけること。ボーペンニャン（大丈夫）の使い方など
- 発展途上国＝可哀想・遅れているというステレオタイプなものの見方の変容
例) ラオスの男女格差指数は高く、日本の方が圧倒的に遅れている。お金を稼ぐことよりも家族との時間や健康を優先している。自分たちの生産物に誇りを持っている。など
- 全国の高校生の横のつながりが生じ、今後のプロジェクトにつながるきっかけとなる。例) 立宇治の3年生と1年生がラオスへの思いを共有できる。宮崎県立飯野高校ではイエメンのコーヒープロジェクトを実施している。明石高専の参加者の家族にコーヒーメーカーの勤務者がいるなど。

昨年度の参加者アンケートでは、一定数の『お客様』的な参加者が生まれてしまいましたが、今回は、そのような参加者は見られませんでした。これは、事前学習での小グループでの情報共有などがうまく機能したためと思われます。

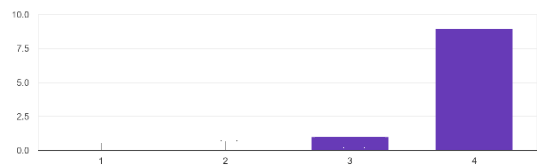


その他の結果は以下の通りです。

I. 基本態度 1) 自国の文化や歴史を知ることは重要であると認識した

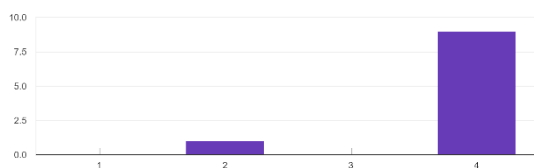


I. 基本態度 2) 訪問国の文化や歴史を知ることは重要であると認識した

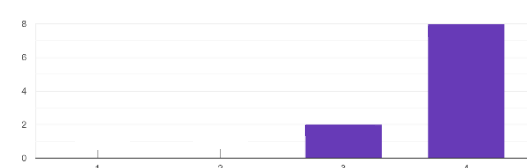


ほとんどの生徒が、他国の文化や歴史を知るだけでなく、自国の文化や歴史を知ることが重要と認識しました。

I. 基本態度 4) 自律的な学習、知識的なバックグラウンドがより必要であると感じた

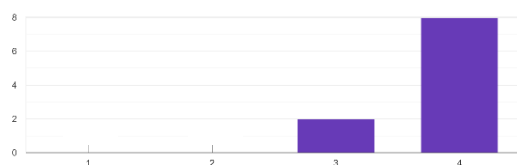


I. 基本態度 6) 国際的な社会問題、環境問題等への課題意識が高まった

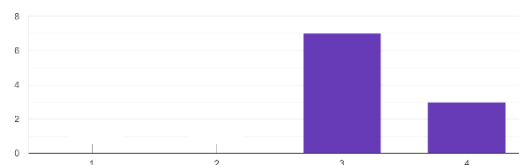


知識的なバックグラウンドの必要性を感じ、国際問題への関心が高まりました。

II. 自律心 4) 自ら学ぶスタンスで研修に参加できた



VII. コラボレーション力 3) 相手の話を熱心に聞き、相手の言いたいことを引き出すことを心がけた



自ら学ぶスタンス、相手の話を熱心に聴き、相手の言いたいことを引き出すことを心掛けるなど、積極的に参加者が参加していたことがわかります。

オンライン研修は、時にインターネットによる調べ学習や動画視聴などと変わらないのではないかと批判にさらされることがありますが、オンラインであっても得られることは多くあります。確かに現地に足を運ばなければ、五感を通した学びや、研修期間全てを現地で過ごすことによるインテンシブな学びの効果は得られません。しかしながら、オンラインでのライブのやりとりや、現地の人々との交流、自分の疑問をそのままぶつけられる機会は、生徒にとっては刺激的であり、インターネットによる一方的な配信では得られないものがあります。今後もコロナの影響がどこまで続くかわからない中で、オンラインによる学びのブラッシュアップは、本校のような WWL 拠点校としてはさらに高度化していくべきことです。その上で、次年度の実施に向けての改善点とは以下の通りです。

- ・ 現地に行く前の事前学習として昨年から生徒自身による調べ学習を行ってききましたが、生徒による調べ学習だけでなく、ラオスの文化や歴史、現在直面している課題などについて、講演会の実施。もちろん個々の興味に合わせた調べ学習も重要であり、今後も継続していくべきですが、系統だったラオスの情報を専門的な立場の方にご講演いただくことで、オンラインで見るラオスの景色が変化すると思います。
- ・ WWL の予算措置が本年度で終了することに伴い、どのように予算を捻出するかを検討する必要があります。受益者負担の考え方に基づき、参加者や各学校に費用の負担をお願いする方法や、プログラムを簡素化することで、費用を抑えるなどの工夫もできるかもしれません。

フィリピン・オンライン・スタディーツアーを開催

本研修実施のポイント

＜昨年よりの継続ポイント＞

- オンラインによって、実際に現地を訪れても踏み込むことのできない場所まで、動画等で知ることができました。これはオンラインで行った大きなメリットです。
- 事前研修を充実させました。事前研修時間内に、小グループ内（4グループ：同グループは同テーマ）でお互いに調べたことを共有した後、短時間で一つのプレゼンにまとめさせたことで、自分の担当領域の知識が深まりました。その後、全体で各グループからのブラッシュアップされたプレゼンを共有しました。これにより、共有内容も、単に最優秀作を共有するのと違い、包括的かつ深いものになりました。
- 連携校の生徒同士が事前に上記の作業をすることで交流し、本番で質問や意見が出やすいようにしました。
- 事前課題には、研修地の紹介ビデオ視聴、意見交換する人の紹介文を読んでおくことなども含め、意見交換のイメージができるようにしました。
- 意見交換のきっかけになるように、日本の貧困状況や自分たちの生活について発表する人を決め、全員が3日間のいずれかで、相手に何かを伝えるようにしました。お互いに情報を交換することで、対等に意見交換ができるようになります。
- 「対話でなければ知ることができない質問が良い質問」とアドバイスいただきました。質問を立てるとき、自分にその質問を向けることで、調べればわかることなのか、対話でなければ知り得ない適切な質問かがわかります。
- 話せば言葉がまとまっていくもので、沈黙の理由を言うのもあり（頭がパンクしそう・初めて聞くことで驚き）というアドバイスもありました。とにかく話してみることが相互の理解につながります。

＜本年よりの新ポイント＞

- メンターとして昨年の参加者やアクセスの活動にかかわってきた大学生・大学院生等の協力を得て、グループでの活動やプロジェクト作りにかかわってもらいました。
- 都市地区と農村地区の両方を訪れ、その関連を知り、農村地区における支援の在り方を考えました。また、農村地区で支援を受ける高校生との交流を行いました。
- フェアトレードの生産現場を訪問し、生産者との交流を通し、農村地区の女性支援の重要性を考えました。
- 学んだことをもとにして、今後どのようなことができるのか、自分たちのプロジェクトを作り、フィリピンの方に聴いてもらい、意見をいただきました。当事者に聞いてもらうことで「Nothing about us without us」を意識できるようにしました。

概 略

本年度も、フィリピン・オンライン・スタディーツアーを認定NPO法人アクセスの協力で実施しました。参加者は宮崎県立宮崎大宮高等学校から2名、愛媛県立三崎高等学

校から3名、宮崎県立飯野高等学校から5名、青翔開智高等学校から1名、立命館宇治高等学校から4名の合計13名でした。三崎高等学校からの参加者の中には、フィリピンにルーツを持つ生徒も参加しており、積極的に参加してもらいました。

本研修の目的は、以下の5点です。

- ・ 貧困の中で生きる人々の生の声に触れ、理解を深める。
- ・ グローバル課題（貧困（都市スラム・農村・教育）を自分事としてとらえる。
- ・ 貧困の構造について、理解を深める。
- ・ 課題解決に向けて行動する意欲を醸成する。
- ・ 学校を超えた生徒同士で課題解決のためのアクションプランを考える。

今まで実施のオンライン研修等の経験を活かし、できるだけ生徒の発言を引き出すようにするとともに、実際のアクションにつながるように、これらの目的に沿って、7日間の日程が計画されました。

その日程と内容は以下の通りです。

- DAY 1 3月5日（土）16:30～18:30 事前学習①
グループに分かれて課題を共有
- DAY 2 3月7日（月）16:30～18:30 事前学習②
参加者同士が仲良くなるワーク＋スタッフ紹介
プログラム概要、訪問地、訪問相手の紹介
アクションプラン作りまでの流れを理解する
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 3 3月8日（火）16:30～18:30 都市スラム
都市スラム・トンド地区バーチャルツアー
スラム出身の若者のライフストーリー
参加者同士で感想シェア
スラム出身の若者と対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 4 3月9日（水）16:30～18:30 農村の中高生
農漁村ペレーズ地区バーチャルツアー
農村の中高生との交流
参加者同士で感想シェア
子ども若者支援を担当する NGO スタッフと対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 5 3月10日（木）16:30～18:30 農村でのフェアトレード
バーチャル・フェアトレード作業場訪問
フェアトレード生産者との交流
参加者同士で感想シェア
フェアトレードを担当する NGO スタッフと対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト

DAY 6 3月11日（金）16:30～18:30） アクションプラン作り

ここまでの学びを踏まえて、フィリピンの人々が抱えている課題を特定し、その課題の解決のためのアクションプランをグループごとに策定し、発表の準備をする

DAY 7 3月12日（土）14:00～16:00） 発表とフィードバック

グループごとにアクションプランを発表

フィリピン側スタッフからフィードバック

Q&A

クロージングリマーク

事前準備

昨年度のオンライン実施に続き、本年度も認定 NPO 法人アクセスと、内容について相談を重ねてきました。その結果、何らかのアクションにつなげるために、研修内でアクション案を考え、当事者であるフィリピンの皆さんに聞いてもらい、意見をもらうところまで挑戦することとし、日程を昨年より1日伸ばすことにしました。

DAY 1 事前研修①

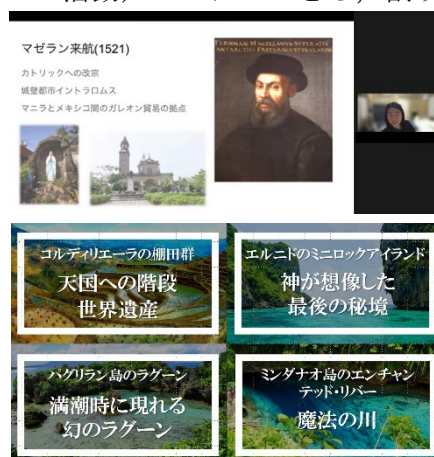
事前研修にて、日本側参加者間の交流の時間を設け、他校の生徒とも知り合いになり、研修中の意見交換をやりやすくしました。漠然とした知識しかない状態の生徒たちが、少なくともフィリピンの基本情報を知り、研修地の概要をと研修の目的を共有したうえで、実際の研修に入れるようにも工夫しました。また、事前学習のグループおよび研修中のグループは、同じ学校が固まらないように事前に決定しておきました。

事前学習は、①フィリピンの歴史（特にスペイン統治、アメリカ統治、日本統治、戦後のポイントをそれぞれまとめる）、②フィリピンの経済、③フィリピンの火山・台風被害、自然と農業、④近年の日本との関係（ODA や NPO の活動）の4テーマとし、割り振られたグループが同じ生徒は、同じテーマで調べ学習をすることとしました。3枚程度のスライドに内容をまとめ、当日そのスライドをもとにして、5分発表することとしています。

次に、30分程度の時間で、全員の発表を一つにまとめるように指示しました。それぞれのグループでのまとめ方は千差万別で、最も効率的に行ったグループは、ある一つのベーススライドを決めて、Google Drive で共有し、共同作業で作っていました。この作業により、自分の担当テーマについて、さらに深く内容を理解することができます。最後に、昨年度同様に、全体でそれぞれのグループの発表を共有しました。これによって、本年度も

- 自分で調べ、まとめる → 発表する + 他の発表を聴く
→ 調べた内容を他の生徒のものと統合（改善）する
→ 発表する

というように、通常の調べ学習の発表よりも繰り返しのステップができ、深い理解につ



なりました。また、全体共有についても、情報の偏りが少なくなり、情報量や質が良くなりました。

生徒たちの発表に合わせて準備した、マニラ中心部とスラム街の写真、タール火山、ピナツボ地区の火砕流跡、レイテ島のマッカーサー再上陸記念碑やセブ・マクタン島のラブラブ像などを写真提示し、教員からまとめを行いました。ラブラブ像では、マゼランが侵略者と書かれており、マゼランを殺害したラブラブが英雄となっていることを確認させました。

DAY 2 事前研修 2

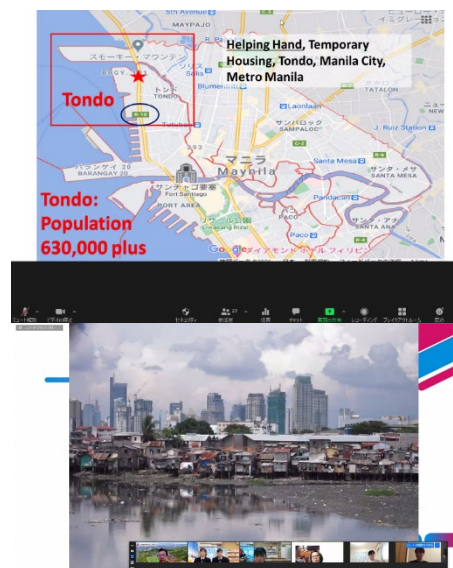
事前研修2日目は、NPO 法人アクセスの事務局長野田さんからお話いただきました。

今回お話しいただく方々は、NPO アクセスとの信頼関係および研修の意義を理解いただけている方なので、突然行って聞くことができるようなレベルではない本質的な話を伺えること、それによって参加者がどのように思い、考えたかを知ることが、話し手に取って最大の報酬になります。また、調べて分かるようなことを質問するのではなく、対話でないと聞くことができない質問をするのがよいと、アドバイスいただきました。質問の立てるとき、自分にその質問を向けることで、適切な質問かがわかるというお話は、とても参考になるものでした。また、「最初に質問する人はえらい・馬鹿な質問するやつもハードルを下げるからえらい・関係ない質問するのも話を広げることがあるからえらい」など、ハードルを下げながら、質問が出ることで相手が喜んでくれることにも触れていただきました。

次に、本研修で訪れる予定の地域とフィリピンの方のおかれている状況等、研修を受ける前に知っておくべき背景を学びました。フィリピン全体のことに加え、これから話を伺う方々の背景を知っておくことは、深い理解のために重要です。スラム街と呼ばれるトンド地区の状況、スラムの住宅事情、農村地区の状況などについても学びました。

スタディーツアー本番は始まっていないにもかかわらず、その背景を知るだけでも今まで知らなかった現実に直面し、これからの学びに期待が高まります。

オンライン研修では、現地の空気感など知りえないこともありますが、オンラインだからこそ、実際に足を踏み入れることが難しいところに入り込んでその映像を見ることができるなど、そのメリットもあることも知り、この研修への思いが高まりました。最後に、この研修での参加者が思う目標ややりたいことを共有して2日目を終えました。



- ・相手を理解する、受け入れる、知る、「共感力」を伸ばしたい
- ・自分のコミュニケーション力を高める。
- ・質問する力を身につける。
- ・考えるちからをのばしたい！

- ・英語力も伸ばしたいし、自分が思ったことを素直に発言するようにする！！
- ・人との関わり方を見直す
- ・今よりももっと色々な見方をできるようにする。
- ・気づく力をつける
- ・頭を働かせて、常に吸収できるようにする
- ・質問力、コミュニケーション力を高める
- ・教育の知識貯金を増やす！
- ・人前で話すのが苦手なので自分の意見をしっかり持って話せるようになる
- ・日本以外の教育現場での課題を見つける
- ・意見を発言し、他の人の意見から考えを広げる力をつける！

DAY3 現地と接続しての研修1 都市地区の貧困

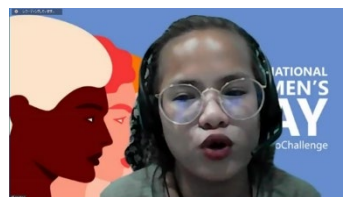
いよいよ、都市地区の貧困について学ぶため、マニラ首都圏のトンド地区を訪問しました。大都会のマニラ首都圏の高層ビル群とは対照的な地域があります。なぜそのような地域が存在するのか？生徒たちは率直な疑問を持ちながらも、いわゆるスラムと呼ばれる地域の現状を目の当たりにして、衝撃を受けたようです。



ここに住む人多くが地方から仕事を求めて都会にやってきた人々であるということを知り、地方における貧困問題と連動している課題であるということ学びました。地震が来たらどうなるのか、大雨や台風の時はどういうように、質問を投げかけていきます。やはり、建物の多くは古くて壊れやすいので、すごく不安で怖いとのこと。思いのほか子ども達が明るいので、それはなぜとの質問も。この暮らしは大変だけど、子どもたちは希望を持って生きているし、瞬間、瞬間の楽しいこと、日常を楽しんでいる。遊ぶこと、人とのつながりを純粋に楽しんでいるとのことでした。



ここに住む、現在 NPO の職員となって、教育支援を行っているある女性から、そのライフストーリーを聞きました。以下はその概略です。



緊張しながら話しますが、どうか心を寄せてください。私の話を聞くと、気持ちがジェットコースター乗っているみたいになるかもしれません。両親はビコール地方出身で、仕事を求めてマニラにやってきました。私は、8歳の時からNGOの支援を受けてきたため、大学まで進学できましたが、あとで話しますが、事情あって教育学部を中退しました。父はアルコール依存症で、兄はドラッグや酒・たばこなどにおぼれていて、兄たちがシンナーを吸っていた頃は生活がぐちゃぐちゃでした。母が私の進学を支えてくれていましたが、父が稼いでくれず、そんな中で大学に行くのは大変でした。8歳の頃から教会に通っていましたが、教会が大きな心の支えで、私が非行に走らなかったのは、教会でのつながりがあったからです。

兄たちが地域で盗みをしたり、母にひどいことをしたりでも、母はそれを許していました。それが私には理解できません。そんな家族の中で暮らすのがしんどくて、兄たちから逃げたくて、私は自分の家族を持ちたいと思いました。18歳の時に初恋の人と暮しはじめ、妊娠出産して娘が生まれて（いま6歳）、人生が変わりました。人生に夢をもう一度持てるようになりました。

私がした経験を、娘にはさせたくないと思いました。そのため、出産後にコールセンターで働くことになります。英語を話すのが苦手で怖くて、コールセンターのリーダーにからかわれていました。コールセンターのプロの人にばかにされて嫌だったけど、すごく頑張って娘を育てるために働きました。シフトは夜。2歳の娘を残して働きに出るのはすごく辛かったですが、母が娘を預かってくれました。自分を恥じることなくがんばりなさいと、母が励ましてくれました。母と娘が私に光を与えてくれ、頑張る力になり、私の力を信じてくれました。「若くして子ができたからといって、大学を諦めちゃダメ。チャンスがあったら復学しなさい」と母は闘い続けなさいと言ってくれました。

しかし、母は以前から糖尿病で、腎臓や肺も影響を受けて、手を尽くし医療支援を探しましたが、進行していて手に負えませんでした。入院していた母の看病をしていましたが、私がちょっと病室を出た間に、母は息をひきとっていました。私を誰よりも支え続けてくれた人を失って、私は希望を失いました。この人を失って、どうやって娘を育てていけばいいのか。私は心底落ち込みました。もう死んでしまったほうがいいのではないかと思います。一時はもう無理だと思いました。しかし、娘がいるから生きなければ、母は天国から見ていて私の力を信じてくれている、と思えるようになりました。そんな時8歳の時から支援してくれていたNGOが連絡をくれました。もう一度学んでみないかと。娘は3歳。どうしようかと思っていたら、姉が娘をみていてくれることになりました。そこで勉強をできることになり、簿記の資格をとることができました。その後、保険会社で働くことになりました。給料は低かったけれど、娘のために働けることがすごく誇りに思えました。制度上の理由で長く働けなかったのですが、その後コロナが来て、仕事がみつからなくなりました。1年間失業状態で、暮らしが大変でした。

私とパートナーは既に関係が終わっていました。一緒にいたころから、「君が妊娠したせいで、僕は自分の人生を生きられなくなった」と私をせめてくれることがありました。私が娘を養うしかなかったのです。でも仕事がなく、すごく辛かったです。兄や姉にとっての負担になりたくないのに・・・なぜこんなことばかり起こるのか。資格をとっても、多くの仕事は大学卒業資格が必要でした。

うれしかったことは、兄たちが薬物をやめられ、父がアルコール依存症を克服できたことです。兄たちには教会の更生プログラムに参加し、大変だったけどそれを克服して教会に通うようになってくれました。仕事が見つからず生活は本当に大変だったが、家族がそうやって良い形で生き直すようになったことはとてもうれしかったです。教会から声がかかり、子どもたちの教育プログラムで講師として教えてみないかと誘われたのです。大学は卒業できなかったけど、子どもたちを教えることができるなんて！とすごくうれしかったです。私の最大の夢がかなうことになったのです。神さまがチャンスをくれ、家族もいい関係を築けるようになりました。

皆さんに何より伝えたいことは・・・家族の支援はとても重要だけど、何より自分を支えてくれるのは自分だから、自分を信じてほしいということです。そしてどうか幸せになって下さい。夢に向かって進み、闘い続けてください。私はまだトンド地区に暮らす貧困層だけど、私のストーリーがほかの人の力になることもあり、そして私は子どもたちを助けることができます。以前は助けられる側だったけど、今は人の力になれていることが幸せです。

みんなに伝えたい。どうか自分を信じてほしい。いろんな悩みがあると思うけど、失敗することであっても、それは人生の失敗じゃない。そういう経験をしただけ。希望を失うことがあっても、自分を信じてほしい。

生徒からの質問例

・なぜ教会に行くようになったのですか ― 3年生の時に小学校と教会が連携していたため、そこか

ら教会の合唱グループに入りました。日曜の教会学校にも参加するようになり、聖書についても学びました。教会での活動が忙しかったので、非行に走っている暇がありませんでした。教会では、自分の才能を生かすことができたし、子どもが大好きだったし、歌も好きだったので、教会でのそうした活動がすごく楽しかったです。

・お兄さんが教会に行けるようになったきっかけは何ですか — 私はあきらめず誘い続け、2番目の兄は歌が得意で、教会の人たちに愛されていたので、克服できたと思います。政府の更生プログラムも無駄だとは思わないけど、この兄の場合は、神様の愛情と教会に集う人たちに受け入れられたということ、愛されているということが彼を変えたのだと思います。上の兄はかなり酷い状態で、母にもひどいことしていましたが、母が亡くなってから教会に行くようになりました。私は兄に「もう手遅れだよ、お母さんはもう死んだんだから」と言ったけど、兄たちは変わって更生プログラムを受けるようになりました。教会の更生プログラムの費用は牧師が払ってくれました。きちんとしたものを食べ、いい仲間をつくったことも回復した原因で、神さまと兄の心が回復を実現したと思います。

・NGOの支援はどのようなものですか — 学校に行くために必要な資金支援、食料（野菜など）支援がありました。大学の学費、課題費用、教科書代も支援してもらいました。

・NGOの支援は家庭状況に応じて変化しますか — 私が支援を受けていたNGOにおいては、家庭の状況が異なっても、支援内容は同じでした。

・支援を受ける前の生活はどうか — 7～8歳のころ、父はいつも酔っぱらっていて、いつもすごく怖かったです。母が近所で野菜を売って生計を立てていました。いつも両親がお金のことでけんかしていて、幸せな記憶がありません。父は仕事を探しにでかけるけど、いつも酔っぱらって帰ってきました。

ライフストーリーが、衝撃的であったため、一緒に涙する生徒もいました。ストーリーにあったように、

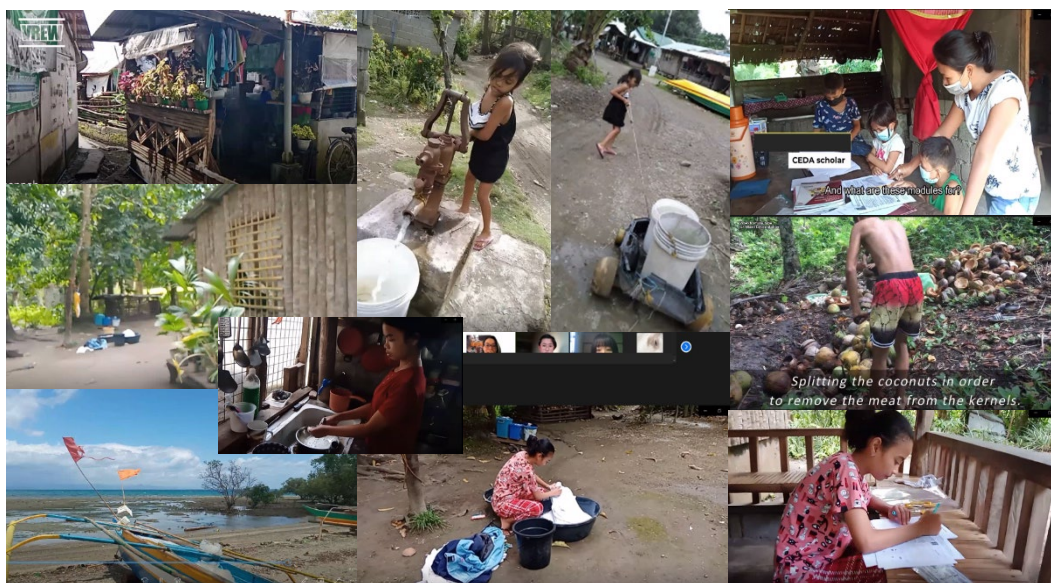
- ・農村部から都市に仕事を求めてくる人がいるが都市に来て大変
- ・大学にいかないと職に就きにくい、

などの構図が浮かび上がりました。また、フィリピンにおいては、スペイン統治時代の産物ではありますが、

- ・教会の果たす役割が大きい

ことも知りました。

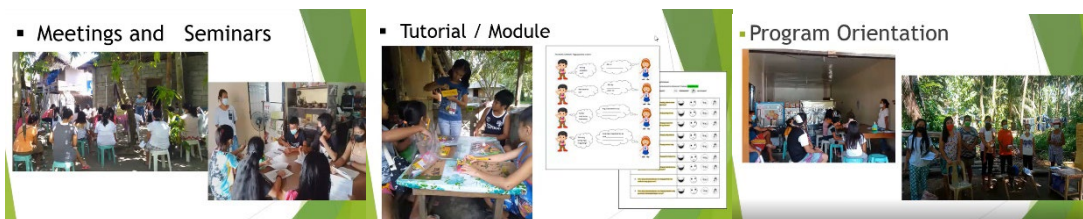
DAY 4 3月9日（水）農村の中高生@Perez



農村部の状況を知るために、ケソン州のアラバット島 Perez を訪れました。都市部とは違い、ゆったりとした印象です。農漁業で生計を立てている家庭は、天候などの収入が左右され不安定です。近年は、台風の影響も大きく、建物に大きな被害が出るのがしばしばあるようです。上水道がないため井戸から水をくんで運んだり洗濯したりなどの家事を、子供たちは積極的に手伝っています。ヤシの実の加工や漁に出る前の準備の様子なども知りました。



Perez においての中高生支援のアクセスの業務、奨学生募集・セミナー・学用品の配布などが紹介されました。その後、アクセスが支援している 2 名の高校生との交流も行



いました。2 名の家にも訪問し、日常の生活を見せてもらいました。フィリピンでは、コロナ禍において、2 年間にわたって今でも学校が閉鎖されています。学校からはプリントが配られてそれを自宅でやる状況のようで、友達と会えないのが寂しかったようです。好きな食べ物など、日常生活についての話で盛り上がりました。また、バナナキューなどローカルフードについても話題が膨らみ、フィリピンの料理やデザートを紹介なども受けました。

ブレイクアウトルームで、振り返りと質問出しをした後、さらに Perez の中高生の生活について質問を重ねました。時間があるときは、日本の生徒と同じように友達とのおしゃべりを楽しんでいるようです。買い物はサリサリストアですることが多いとのこと。サリサリストアは地域に何件もある何でも屋さんです。下水も完備されていないため、使った水はそのまま外に放出したり、汚れが少ない水は植物にあげたりするとのこと。将来の夢は、学校の先生や飛行機のキャビンアテンダントになりたいと答えてくれました。

DAY5 3月10日(木) 農村でのフェアトレード@Perez

アクセスのフェアトレード商品は、マニラ麻を使ったペーパーを材料にしたクリスマスカードなどのカードやココナッツの殻を用いた生活雑貨です。農漁村地区の収入は、天候や台風などの影響を受けやすく不安定です。魚も国外の大型漁船の影響で漁獲量が減っているようです。ある漁師さんは、漁業だけでは生活できず、ココナッツ生産の手伝いも行っているようです。



Perezにある、カードやココナッツの殻を使った製品の制作拠点を訪ね、製作工程を見せていただくとともに、現状をお伺いしました。製作スタッフには、給与ではなく、工賃の形で、制作した製品の数に応じて賃金が払われるとのことで、製品制作にかかる時間（難しさ）によって、単価が決まっているそうです。生



産のためのトレーニングは1週間ほどとのことです。以前は、注文があっても、材料のマニラ麻を使ったペーパーが入荷しないなどで、工程が遅れたこともあったようですが、今は、先を見通しての注文ができていたためそのようなことはなくなっているようです。しかし、コロナ禍では、地域間の異動が禁止されていたため、材料を入荷することも、製品を出荷することもできず、大変であったようです。

この地域では、家族と暮らしながらできる仕事を見つけるのはとても難しいため、このような支援のあり方が、とても重要であることがわかりました。何よりも、農業や漁業での不安定な収入を補うのに十分な仕事になっているようです。カード生産者は、今の仕事はやっていて楽しいし、収入にもつながるので満足していると話してくれました。また、デザインも増やしていきたいと、仕事に意欲を持っている様子が見えきました。

スタッフの日常を知るために、生産スタッフの自宅も訪ねました。コロナ禍では外出や集まることが厳しく禁止されていたため、自宅で紙のカットなどを行うなど、とても苦労したとのことでした。

DAY6 3月11日（金）アクションプラン作り

これまで学んだことをもとに、自分たちは何ができるか、アクションプラン作りを行いました。4グループに分かれ、それぞれのグループにメンターについてもらい議論を進めました。それぞれのグループには、同じ学校の人が混じらないようにしました。これにより、コミュニケーションの能力がアップすることを規定していましたが、お互いの意見を尊重しながら一つのものを作り上げていくことを楽しんでいるように見えました。

グループによってさまざまな視点があり、すべてのチームが違う提案になっていきました。参加者は高校1年が多いため、本当にそれが困っていることなのか、それを実現するための障害はどのようなことがあるかなどまで考えられないチームもありましたが、それも経験です。翌日、フィリピンのスタッフに発表を聞いてもらい、意見をもらうことで、そのような視点が備わっていくものと思います。

ここまでの振り返り 4つの視点

1. どんな現状があったか
2. 人びとはどう感じていたか
3. 大切にしたいことは何か
「変えたい」「学びたい」「シェアしたい」など
4. 私たちに何ができるか



アクションプラン作り

- ・内容：プランの大小は問いません
- ・当日：発表5分以内＋講評10分
- ・方法：スライドを使って英語で（日本語補足OK）
- ・スライドは完成次第、送ってください。
フィリピンに事前にシェアしておきます。

DAY7 3月12日（土）発表とフィードバック

発表は各グループ 5 分、現地からのフィードバック 10 分で行いました。

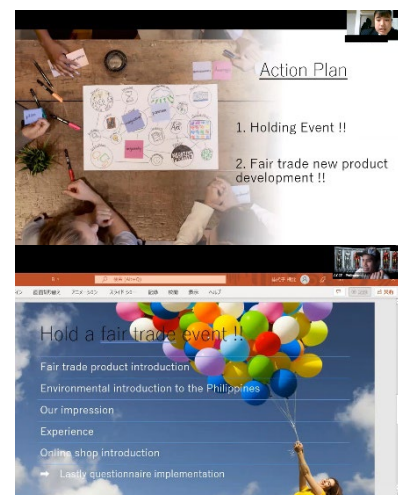
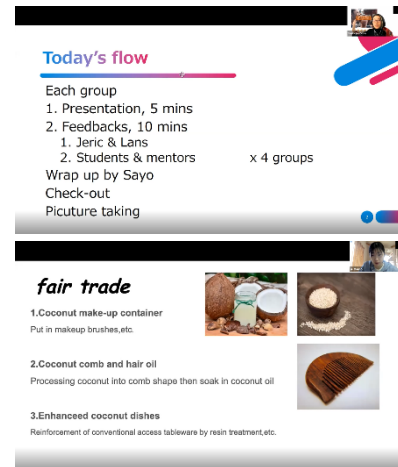
1 グループは、ココナッツの殻を使った新しい製品の提案、バナナの春巻き（バナナ加工品）の開発によって需要を高め、農村部の人々が都会に出なくてよいようにしたいというものでした。

需要を高めることで農村部の収入を上げるという発想は大事です。バナナは安く会社が買い入れていて、農家の収入が薄い傾向があるのは事実です。買い入れられたものは、海外に輸出されるものがほとんどなので、需要を高めるだけでは、問題の解決につながりません。ココナッツの殻での新製品については、検討していく価値があるかもしれません。アクリルレジンなどで水が漏れださないようにすることで食器にすることについては、安全性の問題から慎重になる必要があります。殻の雑貨はオーガニックにこだわっています。櫛などは、殻の形をうまくいかせるかどうかは課題です。仕事をするによってまっとうな賃金が払えるようになるかどうかは、とても大事な視点になります。

2 グループは、イベントの開催によってフェアトレード商品を広げることと、グリーティングカードのような形でピクチャーブックやポップアップブックを新商品にするのというものでした。イベントは学園祭などでフィリピンやフェアトレード商品を作っているところの紹介ビデオ作製、グリーティングカード作成のワークショップ開催などです。

実現性が高いプランですねとのコメントがありました。自分が経験したことを伝えて連鎖を作ることは、大事なことです。

3 グループは、コロナ禍で通学できない状況で、寂しい思いをしている児童生徒のためにコミュニケーションノートブックを提案しました。これによって、メンタルヘルスケアに好影響を与えるというものです。また、フィリピンの先生方とともに、ワークショップを開いて、履歴書の書き方などキャリア教育を浸透させていくというものでした。



とてもいい提案をしてくれました。しかし、実際にこのコミュニケーションノートブックのアイデアはいくつかの学校ですでに実現されているとのことでした。これを広げることはよいことだと思います。しかし、ひとクラス 60 名のフィリピンの公立学校で

は、教員の負担が大きすぎる可能性があります。キャリア教育(学習履歴等の履歴書の書き方)についても、とても面白い視点です。

グループ4は SNS など、フィリピンの状況を伝えたいとの提案でした。現状を伝えることで、寄付などを増やす手伝いをしたいとのことでした。

人に何かを伝えるのはとても大事なことです。同じようなことをしている人がいる中で、実際のコンテンツを魅力的に、他から見てもらえるようにする努力が必要です。みんなで写真をシェアするとか、工夫をすることで、実現可能な提案だと思います。

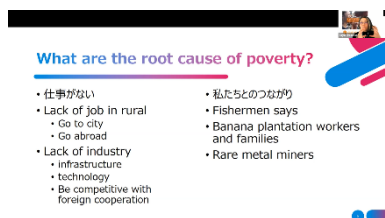
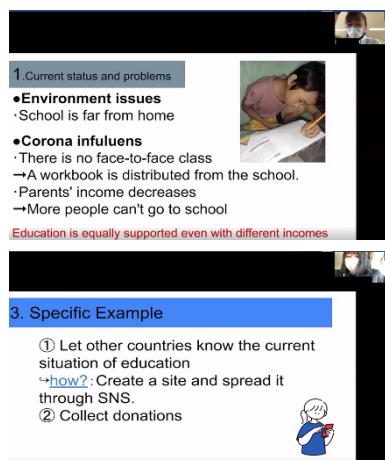
実際に実行するためには、現地の人々が望むことかを検証しながら実行していくことが大事です。協力者を集める必要もあるので、ほかの人の心を動かすこと、応援したいと思わせることがポイントになります。

<まとめ>

野田さんよりまとめをしていただきました。

- ・貧困の原因は何かをしっかりと見極めてほしいこと。
- ・歴史や他国との関係などの背景も大事
 - ー対処療法としてお金を渡すことだけでは根本の解決にならず、原因にアプローチする必要。
- ・仕事がない、仕事があっても収入が少ない(不安定)のは農村部で顕著。
 - ー都会へ行くだけでなく海外にも仕事のために出かけていきます。
- ・インフラの整備が遅れていたり、輸送面、技術面などでも遅れがあったりします。明らかに他国の商品に負けてしまう状態で、輸入に頼っているため、産業が育たない状況にあります。
- ・私たちが手にする商品の裏に、どのようなことが隠されているのか、ぜひ調べてみてください。レアメタル(児童労働の問題など)やバナナ(低賃金・天候の影響)、魚(海外の大型漁船の影響)など、普段手にするものの中に、意外な課題が隠されていることがあります。
- ・20年かけてようやく私はここまで来られました。小さなことから始めることが大事です。本気ならばいっしょにやっていきましょう。

支援する場合に大切なことは、原因を取り除くためにどのようなことを行うかであり、原因を突き止める調査が大事であること、継続することで効果が表れてくることを認識できました。最後に、今回の研修を受けた生徒から、みんなと協力して何かのアクションを起こしたいと考える生徒向けに、グループラインへの参加等が案内されました。今回の参加者は1年生が多かったため、実際に現地を訪れて、アクションを起こしてほしいと思います。



長い研修を終えたばかりの3月15日現在、すでに3名の生徒たちが、実際にアクションを起こしたいと、アクセスと連絡を取っているようです。ぜひ一步を踏み出してほしいと思います。

以下に、生徒の感想および今回の研修のアンケート結果を示します。

立命館宇治高等学校1年

今回のスタディーツアーは、学校で習うことのない現地のリアルな状況や人々の思いを感じ取ることができました。特に、アンドレラさんのお話(ライフストーリー)は心に響くものがありました。一つひとつの言葉を丁寧に紡いで私たちに伝えてようとする姿に、他人ごとではないと痛感しました。

また、私が抱いていたイメージとは違うものもありました。例えば、フェアトレード。フェアトレードといえば、少しお高めで、ボランティア活動として行っているイメージがありました。しかし、蓋を開けてみれば、値段はお手頃で、現地の人たちは、日常生活を支える仕事として、フェアトレードを取り入れていました。日本とフィリピンではフェアトレードとの接し方が異なるのだなと感じました。それと同時に、想像以上に私は知ったかぶりをしているのだと思いました。授業で習っただけで、知った気になっているのだと今回のスタディーツアーで知ることができました。

宮崎大宮高等学校1年

誘われて参加しましたが、フィリピンについての知識が全くなく、英語も得意ではなかったのが不安が大きかったです。でも、初日(土)にグループに分かれて課題の共有を行ったことで不安がかなり小さくなりました。また、英語を翻訳してくれたり、グループワークや英語で質問をする時にメンターの方がサポートしてくれたりして、とても活動しやすかったです。フィリピンの方々は、私たちの質問に全て答えてくださって、ライフストーリーは、自分が今送っている生活はとても幸せなもののだなと気づかせてくれると共に、この現状をなんとかしないといけないと考えさせてくれました。また、厳しい状況に直面しても諦めない姿が印象的でした。

今回、英語を話せない場面が沢山あり、改めて英語の勉強にも励もうと思いました。 “学んだことを、” そうなんだ～” だけで終わらせないように、自分に出来ることを探していきたいです！

飯野高等学校2年

私は将来教師を目指しているので、フィリピンの教育の現状や課題を自分事として捉えることができ、とても良い経験となりました。コロナ禍で海外との接点が少なくなりつつある今、オンラインで海外と繋がる機会を設けて頂いたことに感謝しかありません。本当にありがとうございました。

飯野高等学校2年

今回のオンラインツアー参加できて本当に良かったと思っています！私は人前で話したり、英語を話したりする事が苦手でしたが、今回のツアーに参加して凄く楽しいなと思いました。現地の方の意見も画面越しにですが、直接聞く事ができて本当に感激しました。

私は将来世界中の人々が夢を目指せて、叶えられるような環境を作る1人になるというビジョンを掲げています。今回のツアーで得られたものはとても多く、言葉に表しきれない程です。学んだものをしっかりこれからに活かしていきたいです。ありがとうございました！これからも英語をしっかり勉強して頑張ります！！

メンターとして参加した立命館宇治高等学校卒業生

今回は貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。昨年のフィリピン研修のメモを振り返りながら、今回の研修を受けたのですが、フィリピンへの理解の深まりを実感することができました。新しい後輩や知り合いができたこともとても嬉しく思っています。

まず、私のグループでは、当初は意見の共有や全体での質問に戸惑っていたメンバーが、最終日に向かうにつれて積極的になっていく姿が見受けられました。ポジティブな姿に感銘を受けました。これは、初日に立てた目標が効いているのではないかなと予想しています。目標を共有してもらえたことで、メンターとしてもどのような視点から声かけをすればいいのかが明確になり、メンバーと関わりやすかったです。

また、質問タイムの前に、グループごとでのブレイクアウトの時間を設けてくださったことで、意見の交流ができたことはもちろん、メンバーの方の英語面での不安を解消することができました。この時間の

おかげで、英語が不安だから質問ができない、ということとはできるだけ避けられたような気がしています。また、このイベント全体に流れていた、英語のミスを恐れず、挑戦する雰囲気がとても好きでした！

一方で、私のファシリテーション不足も相まって、アクションプラン作成が不完全燃焼です。さよさんには、メンターも参加者と一緒に考えたらいよいよ、と言っていたいたのですが、どのくらい介入していいかが判断できず、中途半端な関わり方になってしまったと深く反省しています。初めの方は、私のファシリではなくて、参加者の方の気持ちに沿ってアクションプランを練ってもらえればいいなと思い、主に聞いていました。メンバーみんなが真剣にレクチャーに参加し、習った内容をそれぞれ噛み砕いていることが伝わってきました。現地と繋がるツアーの大切さを実感しました！しかし、議論がある程度の段階になるとなかなか進め方が難しくなってくるので、中盤からは私がファシリをしたのですが、どのようなアイデアが求められているかの全体像がいまいち掴めていなかったがために、中途半端なファシリをしてしまいました。（例えば、実現可能性を重視するのか、面白さを重視するのか、フレームワークを使うか否かなど）ですが、今振り返ると、私のチームで出てきたアイデアは、抜けや漏れは多々あったかもしれませんが、メンバーの想いや純粋にやりたいという気持ちからきたアイデアなので、このイベントのラストを飾るものとしてはよかったのかもしれません。もちろん、アイデアは本来評価するものでも、良し悪しがあるものでもないと思うので、すごく難しいです（ビジネスコンテストにすごく影響されている気がしています…）。1日でスライドまで完成というスピード感に慣れている参加者ももちろんいると思うのですが、このようなイベントに参加するのが初めてという参加者もいたため、もう少しプレゼンを作成する時間があれば余裕ができたのではないかと思います。

また、これはみんなの意見を聞いていて感じたことなのですが、私のグループのメンバーは、フィリピンの現状をツアーから理解しているけれど、その現状がなぜ起きているのかの理解が現状ほどは深まっていないような気がしました。貧困の原因について最終日にさよさんから軽くお話があったと思うのですが、アイデア発表後だったため、気づきが反映されず、順番が逆だったらどのようなふうに変ったのか気になります。去年は、私の見てきたフィリピンというタイトルでさよさんからツアー前半？にお話があり、そこで問題の全体像が見えた実感がありました。

最終日のチャット欄などは私たちメンターのコメントが目立ち（笑）、参加者のチャットが少なかったのが少し残念でした。もっとチャットしてね～と声をかければよかったと反省しています。また、Zoomのチャットを使つてのコミュニケーションは少し恥ずかしかったりするので、最終日に向けて初日からだんだんチャットを慣らしていけたらよかったのかな～とも考えています。体感なのですが、Zoomのチャットは、1人すごくチャットを活用するチャットおしやべり（？）な参加者がいる場合か、徐々に慣れていく時に活発になる気がしています。

今回はお声かけいただき、本当にありがとうございました！参加者として楽しかったことはもちろん、メンターという立場を初めて経験し、学ぶことが多かったです。

参加校ご担当の先生よりひとこと感想

毎日の研修が終わってから1時間も、教室に残って振り返りをしていました。

いつも、終わった後「充実していた！楽しかった！」と語っていました。

多くの学校の生徒とともに学びあう形は刺激的でした。

研修時間内に質問を考える時間や振り返りをすることがとても良かったと思います。

現地の方もメンターの皆さんも生徒たちに真剣に向き合ってもらいました。

終了後のアセスメント結果

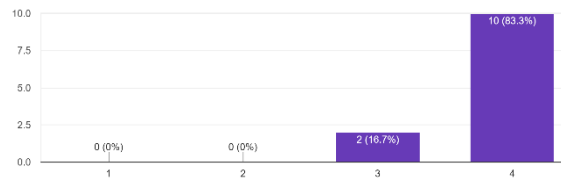
昨年より、実施日程が増え、毎日連続開催でアクションプランも作るということで、参加ハードルが高くなった可能性があります。しかし、逆にそのことが、欠席者がゼロで意欲的に全員が意欲的に参加したという結果に結びついているかもしれません。

ハードルを下げて多くが参加するようにする ⇔ **少人数に絞り深く実施する**

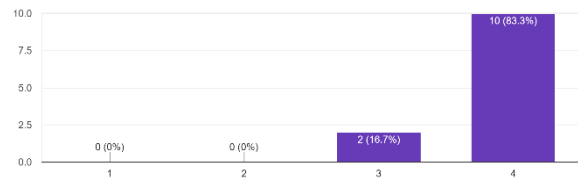
この2点は、研修をデザインする際に大事な視点であるように思います。どちらも求めると中途半端になりかねません。今回の参加者は3月実施ということもあり、3年がおらず、1年が多い傾向にありました。そのため、スキル面での自己評価が低めにでていましたが、マインド面は高い数値であったため、アクションへのきっかけ、すなわち、今後の学びへのステップとなったと思われます。今回の経験を含め、経験を積むことで

スキルもアップしていくものと思います。

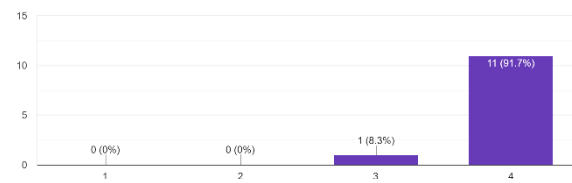
I. 基本態度 4) 自律的な学習、知識的なバックグラウンドがより必要であると感じた
12件の回答



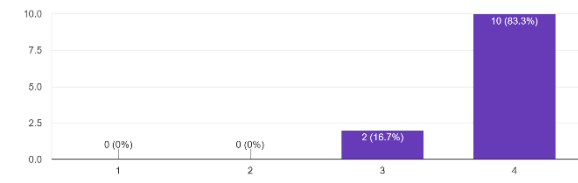
I. 基本態度 5) 英語を学ぶ意欲が高まった
12件の回答



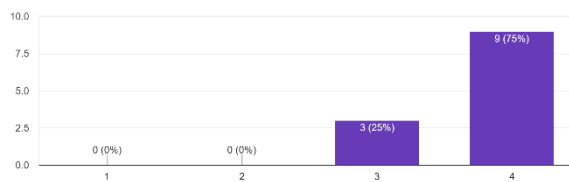
I. 基本態度 6) 国際的な社会問題、環境問題等への課題意識が高まった
12件の回答



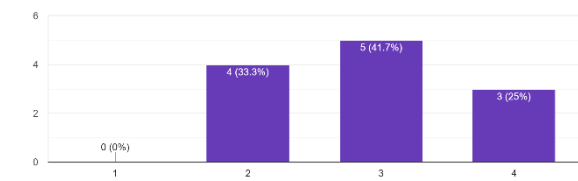
II. 自律心 5) このプログラムで学んだことを日々の活動に適用しようと思った
12件の回答



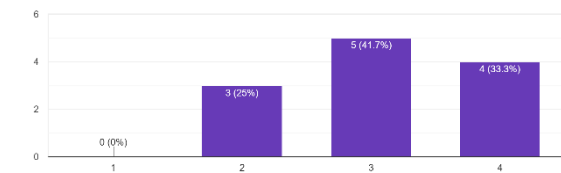
II. 自律心 7) 困難な状況でも、今できることを考え、その場を乗りこえるために自ら行動するチャレンジ意識が高まった
12件の回答



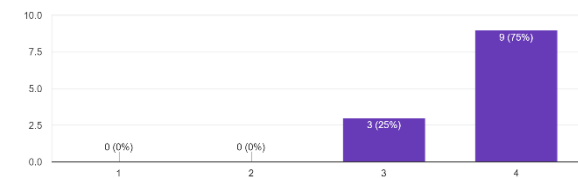
IV. 情報収集力 4) インタビューの目的を元に、効率的に実施するため...ユーシートを作成するなど、事前準備を心がけた
12件の回答



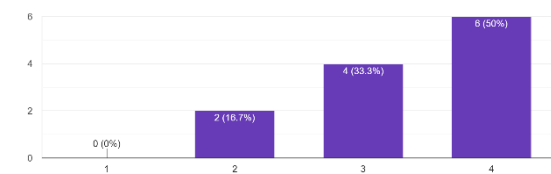
IV. 情報収集力 5) 相手の反応を観察しながら、疑問を残さず必要な情報を引き出すことまで意識した
12件の回答



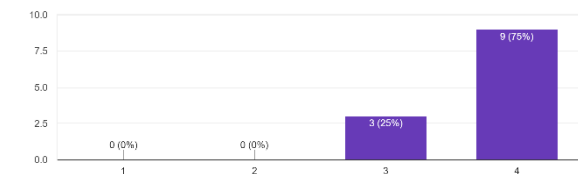
V. 思考力 5) 課題に対し、有効かつ実現可能な解決策考案の経験が積めた
12件の回答



VII. コラボレーション力 3) 相手の話を熱心に聞き、相手の言いたいことを引き出すことを心がけた
12件の回答



IX. 自己管理能力 3) 自分の体質や健康状態を把握しており、体調管理を...することができるということを理解し、心がけた
12件の回答



APU 国際学生との英語によるディスカッション企画を開催

本校生徒および WWL 連携校に国際交流の場を提供する為、立命館アジア太平洋大学国際学生にご協力をいただき、ZOOM を活用した高校生と国際学生との国際問題について討議する場を以下の通り実施しました。言語は英語をメインとし、情報共有は Slack を利用しました。

日程：

①2021 年 7 月 16 日 (金) 16:15～17:50 ②2021 年 11 月 19 日 (金) 16:15～17:50

対象：

APU 国際学生 20 名 WWL 国内連携校 40 名 WWL 海外連携校 10 名 (10 グループ)

日程・参加者 (国内外 WWL 連携校)：

①2021 年 7 月 16 日 (金)

福岡雙葉高等学校 7 名 市川高等学校 1 名 立命館宇治高等学校 17 名

立命館慶祥高等学校 1 名 立命館宇治高等学校留学生 2 名

APU 国際学生 22 名 (バングラディッシュ, インド, インドネシア, モンゴル, ネパール, パキスタン, ベトナム, マレーシア)

②2021 年 11 月 19 日 (金)

約 20 名

APU 国際学生 22 名 (バングラディッシュ, 香港, インド, インドネシア, モンゴル, タイ, ベトナム, ルワンダ, ウズベキスタン, 中国)

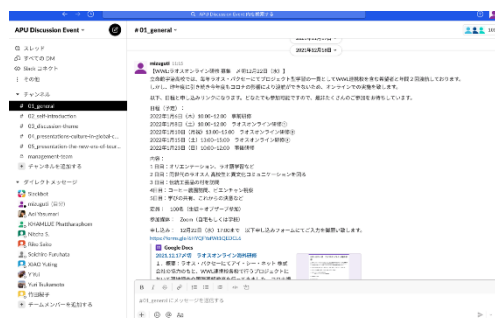
運営：

本校日本人教員がサポートとして入りましたが、メインはネイティブの英語教員が全てをマネージメントしました。ネイティブの先生方が運営するイベントとして連携校から評価が高い取り組みです。

開催媒体：Zoom

情報共有ツール：Slack

これまででは、メールにて申込者に情報を配信してきましたが、Slack に移行したことによって情報共有が円滑に進みました。また、データのやり取りも容易にできるため、最終プレゼンを Slack 上で共有したり、前回の参加者に情報を共有することが出来たりしました。



当日のタイムスケジュール：

- 16:10 学生集合，諸注意
- 16:15 高校生入室，ルール説明
- 16:20 ブレークアウト開始(最初に自己紹介 10 分程度も含む，発表準備も含む)
 - ※ 途中でファシリテーターが各ルームに入り，ディスカッションの様子を見ながら，発表の時間や手順を説明
- 17:00 ブレークアウト終了，グループ発表(学生・高校生各 1 人ずつ)
 - ※口頭発表だけでなく，PPT のチームやサイト見せるチームもある。
- 17:45 発表終了，ファシリテーターから講評
- 17:50 終了

ディスカッションテーマ：

①2021 年 7 月 16 日 (金) 16:15～17:50

Theme: Considering Culture in a Global Context

1) What is culture?

A)How would you describe your culture?

B) Are there any parts of your culture which you believe are unique to your country?

2) Gender Norms in different cultures

A)Are there any stereotypical roles for men and women in your country?

B)Have these roles changed throughout history? Do you believe they will continue/start to change?

3) Does everyone living in the same country have the same culture?

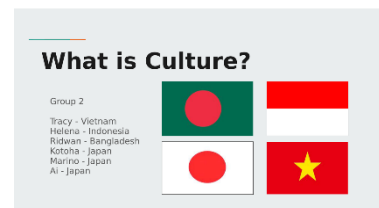
A)What parts of a culture are necessary for people to embrace in order to live successfully in other countries?

B)What are the possible advantages and disadvantages of multiculturalism?

4) Are we able to change culture?

A)What are some challenges facing people who want to change their culture (for example changing LGBTQ+ rights, religious freedoms etc.)? What actions can/have people take in order to enact change?

B)Should we try to change culture at all? Are there any benefits or negative consequences of changing traditional cultures?



Q1. How would you describe your culture?



②2021 年 11 月 19 日 (金) 16:15～17:50

Your Holiday May Never Be The Same: The New Era of Tourism

1) The effect of COVID-19 on tourism

A)How has tourism changed in your country from before the COVID-19 pandemic and now?

B) Should all tourists be required to have a vaccine passport in order to travel? Are there any potential problems with this?

2) Tourism and the economy

A) What are the positive and negative impacts of a city or country relying on tourism?

B) Is it ethical for tourists to take advantage of cheaper prices in lower-income countries (medical tourism, buying holiday homes, general tourism?)

3) Sustainable tourism

A) What kind of impact does tourism have on the natural environment of a city or country?

B) What can you do as a tourist to reduce your impact on the natural environment when you travel?

4) Tourism in the future

A) Do you think social media will be a positive or negative influence on the future of tourism?

B) What do you think will happen to the tourism industry in the future? What changes would you like to see for tourism in the future?

Vaccine Passport

PROS	CONS
- More accessible and efficient for travellers - Guarantee relative safety for the travellers - Tourism industry can operate as usual	- Not everyone can have the vaccine passport -> Inequality - Discrimination between people who got vaccinated and not vaccinated - Expand the wealth disparity between countries

1. What is culture?

Culture is the idea, customs behavior and is connected to food, national symbol, language, clothes and many more. It is something that unites people together.

LET'S DISCUSS ON ZOOM.

英語でディスカッション！
編する場に参加しませんか！

5-17:50
5-17:50
5-17:50

明
書に分れる。
ョンを行う。
アの発表

SSION #1
erent cultures
in the same
culture?
culture?

pujcritumeia.jp

WWL 連携校15校やAPU国際学生と英語でディスカッション！
様々なグローバル 이슈を英語を使って議論する場に参加しませんか？

2020年10月17日(土) 17:00

NOVEMBER 19th
16:15 - 17:50

APU STUDENT DISCUSSION #2
QUESTIONS

The New Era of Tourism

- 1) The effects of COVID-19 on tourism
- 2) Tourism and the economy
- 3) Sustainable tourism
- 4) Tourism in the future

LET'S DISCUSS ON ZOOM.

・連絡先：立命館宇治高校 水口 mail: misugutika@pujcritumeia.jp

2022 Ritsumeikan Uji Model United Nations

This year Ritsumeikan Uji hosted its 3rd annual Model United Nations (MUN) December 4th, 13th, and 14th. The theme of this year's MUN was "Protecting Children" and this theme was discussed about from three perspectives, SDG 4 Quality Education, SDG 2 Zero Hunger, SDG 16 Peace, Justice and Strong Institutions. This year 160 students from 12 schools joined the MUN. Delegates represented 79 different countries discussed, negotiated, and debated in English the best solutions to these various world issues. The event once again was held in an online format due to Coronavirus, but the plan is to hold the event again in-person in the future.



<i>2022 Ritsumeikan Uji MUN Topics</i>	<i>Participating Schools</i>
Session 1: Quality Education (SDG 4) a) Equal access to education b) Increased teacher training c) Access to technology	Doshisha International High School Fukuchiyama Seibi High School Fukuoka Futaba High School Gyosei International School Hanazono High School Katoh Gakuen Gyoshu High School Misaki High School Miyazaki Omiya High School Okayama Gakugeikan High School Otsuma Nakano High School Ritsumeikan Moriyama High School Ritsumeikan Uji High School
SESSION 2: Zero Hunger (SDG 2) a) Sufficient food for infants b) Nutrition education c) Preventing food waste	
SESSION 3: Peace, Justice, and Strong Institutions (SDG 16) a) Legal recognition for all children b) Promoting participation in global governance c) End abuse and trafficking of children	

Student Reflections on the MUN

MUN changed my view towards the world so much. Even though there was a difficulty with language, the most difficult challenge was the way of doing the event with people who knows a lot about and had experienced MUNs and people who have never heard of or experienced it. Some people claimed personal opinions towards the issues, not their country's opinions. It was hard to make it works and have common ideas about the event. This problem will happen when we act as a team or with lots of people. I believe that trying to keep making people inclusive will make us all have value to join the event. Hosting MUN has lots of benefits such as understanding the world situation from a variety of perspectives and gaining skills in negotiation. We don't think about and try to know the other sides' viewpoints in daily life because the media is sending opinions from the one perspective only. During the process of researching the country's claim, we could find out the problems they are facing to, the position towards the conflict and why they have that position. By knowing these issues, I could expand my point of view and gained the curiosity to see things from other sides as well. Besides, the negotiating skill is the one we can gain especially in MUN. We analyze the main claim of each country and how much they can compromise to find out a point to agree with. MUN develops our capability and humanity.

HY IM3 (2021 Ritsumeikan Uji MUN Bloc Leader)

I joined the MUN two times this year. It was a good experience for me to talk in English about issues that are being discussed at United Nations. I was able to present my information to the all the delegates about my country and issues about the topic. It was a good chance to think about the problems in the world such as Covid-19, education, and marine life. In the second time, me and my partner led the discussion when we were deciding the amendments. As I participated in more MUNs, I was able to be more confident because I got used to the procedures. For the second time, I was a Chair, which leads the whole meeting. It was my first time being Chair and I was nervous at first, but I was able to do well with the help of many people. I want to do it again next year as well.

SK IG2 (2021 Ritsumeikan Uji MUN Chair)

This was the first time for the 1st grade students to participate in the Ritsumeikan Uji MUN, and some students and I were confused about what to do at first, but it was a fun experience with the support from the seniors in the 3rd grade mainly. It was my first experience to discuss international problems and solutions that I don't usually even discuss in Japanese in English, and I felt that we could broad our mind by discussing in English and knowing other values and cultures. In addition, I thought this MUN was a good opportunity to build confidence speaking English. Also, I was assigned the position of board secretary in the MUN leadership team, so it was a great learning experience. I am an IM course student, so I can't participate in the next MUN because I will be studying abroad, but when I am in 3rd grade, I want to support my juniors and friends as my seniors supported me.

KY IM1 (2021 Ritsumeikan Uji MUN Board Secretary)

オンライン・グローバルPBLプログラム“FLAG”を実施

授業の中でPBL型学習を実施している学校が、全国で増えてきました。しかし、授業が終わった後に、さらに発展させて活動したい、授業で設定されたテーマやグループ以外でも自ら行動を起こしたいという生徒が出てくるため、彼らの意欲を支えていく仕組みを考える必要を感じていました。連携校や連携団体と協力して、連携校共通の選択授業を作り上げることはハードルが高かったため、まずは、大学のサークル活動をイメージした、連携校共同の課外活動の位置づけで、プログラムを開発することとなりました。このプログラムは、コンセプトよりFLAGと名付けました。FLAGという横串でWWL連携校を繋ぎ、参加生徒がお互いに影響を与えながら学んでいく仕組みとなります。

○コンセプトは以下のように定めました。

『地球規模で探求・実践し、未踏の地に旗を立てる』

世界中を探究しながら、次の時代を担うリーダーへの1歩目を踏み出すためのプログラムです。私たちの思う次世代リーダーとは、自分はこれだという分野で旗を立て、活動する人です。世界中の社会課題やビジネスのリアルに飛び込みながら、自分の探究のテーマを見つけて、個人の行動計画を策定します。

運営は連携機関の協力を得て行いました。また、WWL予算措置終了後の自走のための実験的な役割を持たせることとし、参加費を徴収して実施することとしました。参加申し込みは予想を上回り、55名に達しました。

○実施期間および参加者等は、以下のようになりました

期 間：約3か月間(2021年6月3日～8月26日)

活動頻度：毎週90分/回、16時40分～18時10分

対 象：WWL連携校に在籍する高校生

参 加 者：55名

福岡雙葉高等学校・愛媛県立三崎高等学校・東明館高等学校・立命館高等学校・
立命館慶祥高等学校・立命館宇治高等学校

開催方法：Zoom

実施機関：タイガーモブ株式会社(統括管理：拠点校立命館宇治高等学校)

運営コストは参加人数にかかわらず固定的であるため、費用総額を参加者で分担するものとし、15,000～20,000円での募集案内をしました。多くの申し込みがあったため今回は15,000円となりました。また、大学の講義を意識して、アウトプットの時間を含めると15回以上となるように設計されています。

Slackを使い、参加者が自由に交流し、専門家に質問できるようにしました。ここで揉まざる効果が生徒の感想から読み取れ、生徒の変容を手助けできました。自己負担の上での参加に、生徒が集まるか不安がありましたが、このような形での開催も可能であることが証明できたと思います。

スケジュール：

期間概要	#	実施日	実施時間	活動名
Observe	第1回目	6/3	16:30-18:00	Observe 1 SDGs概論：気候変動とエネルギー（ゲスト：高間さん@（インドネシア・バリ島））
	第2回目	6/10	16:30-18:00	Observe 2 異なるレンズで世界を見てみよう（イスラエル・パレスチナ問題）（ゲスト：伴さん@南アフリカ）
	第3回目	6/17	16:30-18:00	Observe 3 挑戦が豊かさを生む（ゲスト：中須さん@京都）
Orient	第4回目	6/24	16:40-18:10	Orient 1 明日からの小さな挑戦
	第5回目	7/1	16:40-18:10	（テスト期間につき休み）
	第6回目	7/8	16:40-18:10	Orient 2 IKIGAI Cycle①（人生曲線&自分と向き合うワークショップ）
	第7回目	7/15	16:40-18:10	Orient 3 IKIGAI Cycle②（社会と繋がるワークショップ）
	第8回目	7/22	10:00-11:30	Orient 4 IKIGAI Cycle③
Decide	第9回目	7/29	16:40-18:10	Decide 1 Visioning 5 step
	第10回目	8/5	16:40-18:10	Decide 2 行動計画をつくらう！
	第11回目	8/12	16:40-18:10	Decide 3 ストーリーの大切さ
Act	第12回目	8/19	16:40-18:10	最終発表会
	第13回目	8/26	16:40-18:10	全体の振り返り
	以降アウトプットは続けたいだけ			

プログラム実施内容（DAY1～3 世界を知る：Observe）

プロフィール

DAY1: 高間剛@インドネシア

1973年愛知県生まれ。英国オックスフォードの環境学博士取得（オックスフォード神戸奨学生）。経済環境学博士。インドネシア・バリを拠点とする環境シンクタンク su-re.co CEO。気候変動・環境分野の専門家として、JICA、国連、アジア開発銀行、ドイツ政府、スウェーデン政府、欧州連合など40以上の国際プロジェクトに従事。また、環境シンクタンク・ランキングで世界1位であるストックホルム環境研究所のアソシエイトと、バリ島ウダヤナ大学の客員教授も兼務している。

DAY2: 伴優香子@南アフリカ

南アフリカヨハネスブルグから、海外リモートワーク。オンラインでもオフラインでも、世の中の人の視野・世界を広げ、新しい挑戦をしようという志を、Webメディア「チャリツモ」でコンテンツライターとしても活動。2021年より、南アフリカのUniversity of the WitwatersrandでCritical Diversity Studiesを学ぶパートタイム大学院生でもある。

DAY3: 中須俊治@トーゴ※

1990年、京都生まれ。滋賀大学経済学部卒業。株式会社AFURIKA DOGS・代表取締役社長。重彩プロデューサー。「みんなが笑って過ごせる世界をつくる」ために日本とトーゴ共和国を往復し、エウェ族と京都の職人の染色技術を重ねて、商品開発している。大学在学中に単身アフリカへ渡航し、ラジオ局のジャーナリストとして番組制作に携わる。大卒後、京都信用金庫に入社。嵐山地域で営業を担当した後、独立・起業。モットーは他力本願、2児の父親。

講演テーマ/内容

SDGs概論：気候変動とエネルギー

世界No.1の環境シンクタンクにも籍を置く高間さんから、人類が直面する気候変動の危機について、優しく解説。地球温暖化、気候変動、学校の授業でもニュースでも聞いたことのある内容について、世界の最先端で活躍する専門家から課題の本質をレクチャーいただきました。

異なるレンズで世界を見てみよう（イスラエル・パレスチナ問題）

今も続くパレスチナ問題について、イスラエル側、パレスチナ側、その中の当事者たち、それぞれの異なる視点から同じ問題を見つめるレクチャーを実施。異なる文化や背景に想像力を働かせること、異なる視点から多角的に物事を見る大切さを学んでいただきました。

挑戦が豊かさを生む

生まれ育った京都の信用金庫での出会い、アフリカ・トーゴで触れ合った人々との絆。中須さんの生き方や仕事への向き合い方、起業のストーリーに触れることで、挑戦することの大切さ、挨拶や感謝など当たり前のことの大切さに触れることができました。

プログラム実施内容（DAY4～8 自己探求：Orient）

- IKIGAIワークショップを実施し、自己の内面の深掘りを行った。
- タイガーモブが独自に開発したワークショップであり、①自分と向き合い、②社会と向き合って、③自分と社会とを重ね合わせて、④ありたい姿とそれに向けたアクションプランを立てる、の4ステップを実施。
- 中高生のうちに自分の内面に向き合い、かつ多様な参加者からフィードバックをもらう機会は少ない。人生を通した内省の機会によって、メタ認知を引き上げ、内発的動機づけがなされ、自分の選択する道の納得感が高まる。

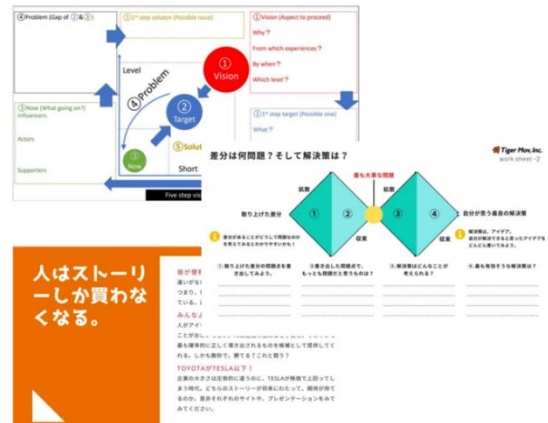
いよいよサイクルに挑戦！

① Focus: SELF
② Focus: Community
③ Focus: LIFE and FUTURE
④ Goal Setting

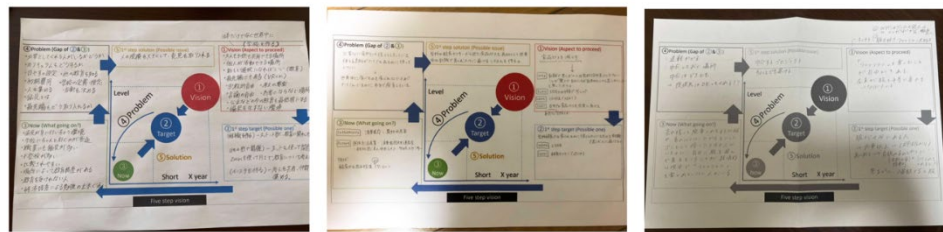
人生を振り返る

プログラム実施内容 (D A Y9～11 行動計画策定:Decide)

- ・ 自分オリジナルなプロジェクトの立ち上げに挑戦。
- ・ プロジェクトを形作るためのフレームワークを使いながらワークを行った。Orientで自己探究して認識した内発的動機づけをもとに、自分の将来へのビジョンを描き、課題を設定し、解決策としてのプロジェクトを策定した。
- ・ 参加者の様子を見ながら、必要なスキルやノウハウを見極めて、レクチャーやワークシートを設計した。
例：ストーリーテリング、課題設定と解決策考案の方法論

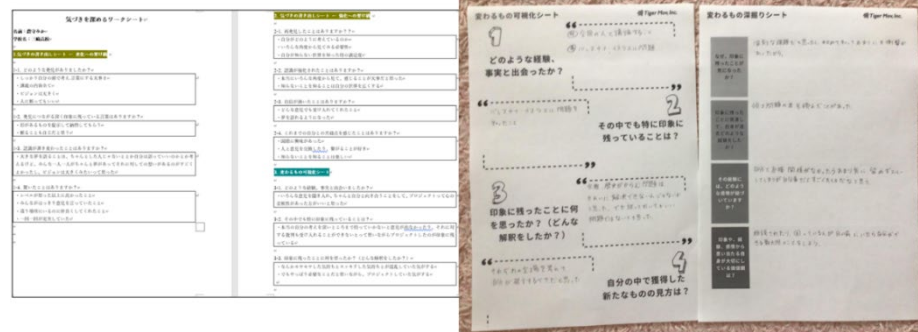


实施例



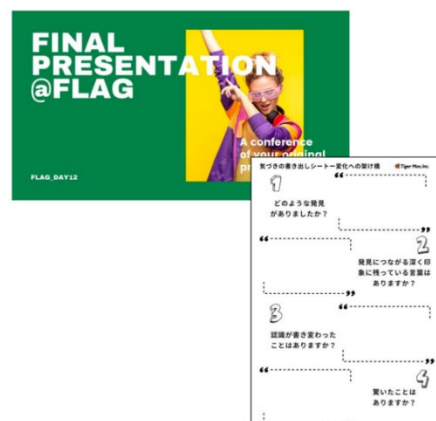
プログラム実施内容 (DAY1 2, 13 最終発表&リフレクション)

实施例



参加者アウトプット例

- ・プログラムの締めくくりとして、最終発表会を開催。
- ・1部屋8~9名、3つのブレイクアウトルームに分かれ、1名7分の持ち時間にて、自信のプロジェクトについて発表を実施（後述するが当日欠席あり）。
- ・最終日に、3か月間の総振り返りとして、7枚の振り返りシートを用意し、リフレクションを実施。気付きや学びを整理し、深掘り



プロジェクト例：

- ・服のリユース（古着回収→片親世帯への寄付）を通して、誰もがファッションを楽しめる世界を実現するプロジェクト
- ・多角的な視点からニュースを分析するサイトを作り、バイアスのかかった情報を減らすプロジェクト
- ・ヴィーガンを実践し啓蒙して脱・動物搾取を目指すプロジェクト
- ・理想の学校を高校生自ら作るプロジェクト
- ・家庭内での家事負担の意識のズレを可視化して女性が働きやすい社会を作るプロジェクト
- ・日本と韓国の若者交流イベントプロジェクト
- ・全国で動物保護活動を展開してさっ処分される動物を生まない社会を作るプロジェクト
- ・障害を持った方の居場所を作るプロジェクト
- ・自分が食べた食べ物を管理できるアプリ開発を通して人々の健康への意識を変える起業プロジェクト
- ・海洋プラスチック問題に関わる絵本の作成を通して問題の認知を広めるプロジェクト



事後アンケート

【プログラムを経て、自分が成長したと思う点と、その理由を教えてください。】

- ・ ボランティアとかそういう無償での働きについての考えが変わった。人のために何か出来ることかしたいと思ったから。
- ・ 枠外への挑戦この FLAG もそうですが、学校外などのプログラムに参加し、そこでの学びを活かせられると思ったから
- ・ 自分がこれからしたいことや、それを具体的にどう実行するかを見つけられたこと。
- ・ 価値観が広がった。初めて大きいビジョンを掲げて、やることが明確になった・知らなかった社会問題を知る機会となった。
- ・ zoom やほかの場面で自分から発言できるようになった。自分の考えを発表する機会が多かったため。
- ・ 人を素直に尊敬する力がついた。いろんな方のお話を聞いているうちに、素直に色々考え、感じるようになったから。
- ・ 「自己を”みる”目”自分のやりたいこと、学びたいこと、成し遂げたいこと、これらは将来をかけて答えを探していくものだと思います。高校生の時期にこの答えを決めるのはある意味怖いですが、高校生だからこそ、自分の将来像となりたい自分に近づこうとすることができました。
- ・ いろいろなことについて日常から考えると言うこと。今まではあまり何も考えずに過ごしてた
- ・ フィールドバックできるようになった点!今までは相手の話したことに対してすぐに質問とかが言えなかったから。
- ・ 視野が広がった。今までは正直に言って医療系に興味がなかったし、他のことを知ろうとしませんでした。でも、FLAG のはじめに 3 人の方のお話を聞いて、違う分野の話聞くことも大切だと気がつきました。そして、FLAG にいる高校生は、鋭い視点を持っていて、自分もいろんなことを考えることができました。そこも、成長した点だと思います。
- ・ 物事を多角的に見る点を最も養ったと思う。私は元々固定概念が強かったが、講師の皆様のお話を伺ったり FLAG のメンバーのみんなの意見を聞いたりしてひとつひとつの物事の他の可能性を探すように習慣づいたから。
- ・ プロジェクトを達成するためになにをどうすればいいのか考える力、計画の仕方
- ・ 自分の考えを話すとき、相手の年齢や理解度によって言葉を選んで話すこと
- ・ 1 から新しいことに挑戦してたいと思うようになったこと。今まではできたらいいだろう、と思うだけで、実際に行動に移したことがなかったから

【プログラムの中で得た、新しい気付きや学びについて教えてください。】

- ・ 自分と違う価値観の人としっかり話すことは自分の幅も広がるしなにより楽しいということ。
- ・ 「なぜ?」という深掘りは自分、相手を知るのに大事なことだし、おもしろい!
- ・ 自分の視野を広げることが出来たと思います。 ・ 自分のしたいことや考えを明確にすること
- ・ 自分の学びたいことを決める/探すことができた。
- ・ 世界のもっといろいろなことあいまこの時間にうごいていとおもうとすごいと思った”
- ・ 自分の思っていることを言葉にできてよかった。
- ・ 物事の見方はいっぱいある。悪く描かれてる人、グループなどが、ただ単純に完全な悪とは限らない。
- ・ 高い志をもつ学生と交流したことにより様々な視点から物事を捉えることの大切さを学べた。
- ・ テーマに対して興味のある人同士で活動して良いんだということ。学校ではそういう話をしないので

全部1人でやることだと思っていたから。

- ・ 高校生でもなにかアクションを起こせることを知りました。今までは難しそうだなやそういう才能のある人しか行えないと思っていたけど、今は誰でもやろうと思えばできるのだなと思いました。
- ・ 何事も自分から行動を起こすこととどんな事柄でも自分の意見を持って対応することが大切だと思った。私もFLAGのメンバーのように自分から行動を起こし活発に活動していきたい。
- ・ 他の高校の人と話しているうちに、みんなのプロジェクトがとても面白くて色んな考え方をしている人がいることを知った。
- ・ 努力は必ず報われないが、無駄にもならない
- ・ 自己分析をするとやってみたいことも見つかる何かに取り組んだ後の振り返りは大切
- ・ 勉強することは視野を広げることにつながるんだなと思いました
- ・ 何個かの講演を聞いて、今できることを当たり前に行っていたら、人に好かれるということ

第4章 5. 教科と結びつく企画(4)

立命館アジア太平洋大学の夏期海外研修をAP化する取組

立命館アジア太平洋大学が持つ海外研修プログラム「FIRST」を高校生に開放してAP化することが検討されてきました。このプログラムは、台湾を舞台に、現地で出された指示をもとに探究活動を独自に行うもので、現地で宿の確保も交通機関の利用も自力で行っていくというものです。

令和2年度に、実験的に参加し、その後AP化を検討するスケジュールで計画していましたが、コロナ禍でプログラム自体が中止されました。高校生だけでも実験的に開催することも検討しましたが、海外渡航が難しい状況が続き、実現していません。

前項のFLAGは、もっと挑戦をしていきたいという生徒たちをつなぎ、サークル活動的に他校の生徒ともに活動をしていくものでしたが、AP授業の開発が遅れたため、FLAGをこのプログラムの代替措置の性格も持たせて実施しました。

WWLの予算措置終了後でも、「FIRST」に高校生が参加できるように調整していきたいと思います。

マイプロジェクトアワード2021 in 立宇治開催

12月3日(金)マイプロジェクトアワード in 立宇治を開催しました。この企画は授業などで実施したプロジェクトを発表し、高めあう場で、2019年から開催しています。今回は過去最高の13プロジェクト・51人の生徒が参加しました。2年生が多かったのが今年の特徴でした。2019年から始めた本取り組みも3年目となります。発表レベルは年々上がり、この場をきっかけにブラッシュアップするプロジェクトも少なくありません。学年関係なくそれぞれの発表に刺激を受ける貴重な時間となりました。

1月22日(土)に開催された、マイプロジェクトアワード京都サミットには本校から9プロジェクトが参加しました。京都サミットに向けても貴重な場となったようです。現在はコロナ禍ということもあり、本校のみの参加、見学者も制限という状況で開催していますが、今後は他校にも広げることができればと思います。以下が発表プロジェクト一覧と当日の写真です。

<プロジェクト一覧>

A-①「Animal Protection」

私たちは動物愛護に興味があったので、現在の動物園や水族館の現状を調べ、動物たちの飼育環境を変えるための署名活動を行いました。ポスターやインスタグラムを活用し、私たちの活動を広められるような工夫を行いました。

B-①「硬質化によるマイペットボトルの普及」

大量に消費されるペットボトルを硬質化することでポイ捨てを減らし、リユース率を高める。企業や制度を利用して硬質ペットボトルの普及を目指す！

A-②「Uber Clothes」

私たちはSDGsの授業で学校とRitsKidsから不要になった服を集めて、宇治市役所の服回収ボックスと海外に服を送っている「いいとこシップ」という団体に寄付するプロジェクトを行いました。

B-②「紙パックで紙を作ろう！」

私たちは6人で高校2年生から購買で買った紙パックを回収し、紙を作りました。完成した紙は計算用紙として使用してもらうために、教室に設置していました。実際に使っていた生徒が数人いたので、成功することができました。

A-③「海洋プラスチック」

私たちは今の若者の考えを知るためにTikTokを使って「プラスチックを使うことに抵抗があるか」というアンケートを行いました。その結果と今の現状の矛盾、その問題の解決方法を考えました。

B-③「キャップからワクチンへ」

学校全生徒からキャップを集めそれを企業に送りワクチンに変えるというプロジェクトです。

A-④「Selling Fair-trade Chocolates」

フェアトレードのチョコレートを購買で販売するというプロジェクト。

B－④「犬猫殺処分をゼロに」

現在、日本のペットに関する最も深刻な社会問題の一つとして殺処分が挙げられます。動物が大好きな私たちは殺処分の現状を知り、少しでも助けたいと思い、小学生や立命館宇治高校の生徒に向けての講習会などを行いました。

A－⑤「宇治市活性化プロジェクト」

「宇治市商店街を全世代から愛される街に」というコンセプトで立命館宇治高校の購買で宇治市商店街のお店の商品 販売し、知名度を上げて宇治橋商店街に足を運んでもらうプロジェクト

B－⑤「TADDA」

LGBT＋Qの人たち（社会的弱者）が生きやすい社会をつくるために、シミュレーションゲームを通じて、LGBT＋Qの人たちが抱えている社会に対する不公平感を学ぶことができ、体験することで行動を起こすことができるアプリの開発。

A－⑥「PR Uji」

宇治市は緑や川など自然が多い街でありながら、交通の便が良い街です。そんな宇治がコロナウイルスの影響を受けて観光客が激減しています。その宇治の良さを再発見し、観光を活性化させることを目指したプロジェクトです。

B－⑥「みなもとランタン～灯せ！光の輪～」

私たちはコロナウイルスの感染拡大によって寂しい思いや退屈な思いを抱えた子どもたちの心が明るくなるような、古紙とペットボトルを使ったランタンを開発しました。

A－⑦「うじらぼ」

京都でオーガニックコスメを製造販売しているコトラボさんとコラボし、環境や人体に良い宇治茶エキスを配合した立命館宇治限定デザインのオーガニックマスクスプレーを興風祭で販売する。環境にも人にも優しく、SDGsにそった商品を広めるプロジェクト



WWL 研究報告会を開催

WWLでの学びの成果を共有・普及し、事業連携団体および連携校間での共同事業の継続発展のため、1月21日・22日にWWL研究報告会を開催しました。本年度は、事業連携団体、連携校の皆様には来校いただき、それ以外の方には、1日目はZoom、2日目はYoutube Live 配信を提供しました。参加申込者は約200名でした。

WWL予算措置の最終年であるため今までの成果を確認・総括しながら、今後の展開について考える機会としました。それと同時に、探究の学びについて整理し、今後の発展について議論する機会ともしました。

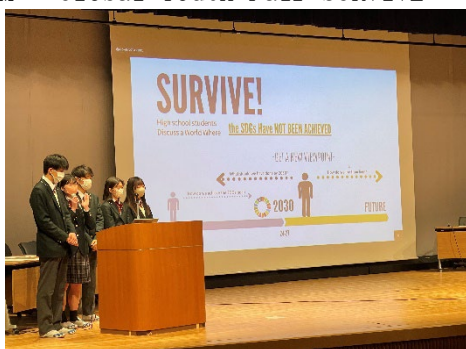
プログラムは以下の通りです。

1月21日

1. 開会ご挨拶 ヒックス ジョーゼフ校長・本日の概要
2. 生徒成果発表@ それぞれの Zoom (全 16 Zoom) 全生徒が発表
 - ・ IG コース コア探究 (高校3年) 12 Zoom 【日本語】
 - ・ IM コース+連携校 3年間 (高校1～3年) 3 Zoom 【英語】
 - ・ IB コース コア科目 (高校3年) 1 Zoom 【英語】
3. AL ネットワーク推進会議 大会議室 (回 棟 2F)
 - ・ 連携校・連携団体関係者のみ (非公開)

1月22日

1. 開会挨拶・諸連絡
2. 代表生徒成果発表
 - IG “廃棄苗を子供たちの教育のツールにすること” 【JPN】
 - IM “Global Youth Fair SURVIVE” 【ENG】



3. 総括と今後の展開

『WWL 予算措置最終年にあたっての総括および今後の展開について』

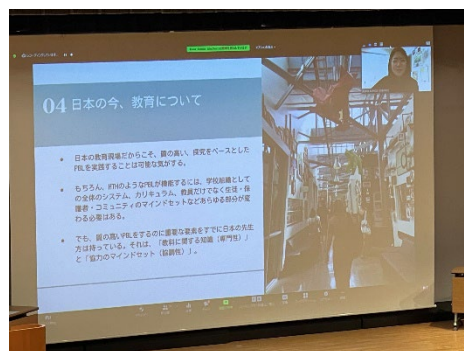
4. 基調講演

一般社団法人こたえのない学校 藤原 さと 代表理事

『探究の学びの到達点とこれから』

High Tech High 大学院在学 芦田 加奈 氏

『探究する学びの実践報告～学び手として見たこと～』



5. パネルディスカッション 『WWL の学びの到達点と今後の展開』

パネリスト

【基調講演者】

- 一般社団法人こたえのない学校 藤原 さと 代表理事
- High Tech High 大学院 芦田加奈氏

【WWL 連携企業・団体】

- 公文教育研究会 鳥居健介 社長室リーダー
- TigerMov 中村 寛大 COO・副社長
- タクトピア 長井 悠 代表取締役
- 認定 NPO 法人アクセス 森脇祐一 常務理事
- 立命館アジア太平洋大学 伊藤 健志 学長室課長

【WWL 連携校】

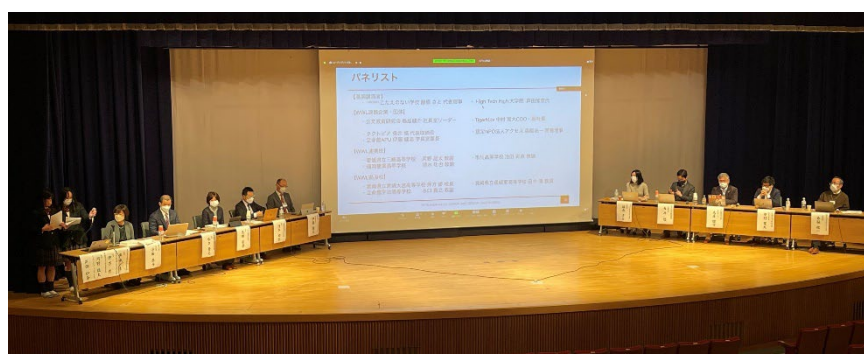
- 愛媛県立三崎高等学校 河野 雄太 教諭
- 市川高等学校 池田 彩奈 教諭
- 福岡雙葉高等学校 清水 功也 教諭

【WWL 拠点校】

- 宮崎県立宮崎大宮高等学校 押方 修 校長
- 長崎県立長崎東高等学校 田中 清 教頭
- 立命館宇治高等学校 水口 貴之 教諭

ファシリテーター

浮田 恭子宝塚大学准教授・立命館宇治中学校・高等学校 元副校長



6. 閉会ごあいさつ

7. 運営指導委員会（関係者のみ）

WWL 研究報告会資料

当日の発表資料については，別冊にまとめているので，別冊をご覧ください

生徒の成長記録ビデオ作製

昨年度より、生徒の成長記録ビデオを作成しており、本年度は2本のビデオを作成しました。このビデオは、以下のように活用するために作られており、WWLの成果物としてすべての高等学校と共有するものです。

<制作の目的>

- これから高校の学びを始める新入生にとって
将来の目標となる先輩像をイメージできるもの
探究の学びとはどのようなものかをイメージできるもの
・・・高校生活が始まったばかりの生徒にとって、何をどのようにすればよいのか右も左もわからないとき、このビデオを見ることで目標となる将来像や何をすべきかが定まってくることを期待します。
- 卒業前の生徒にとって
自己評価の基準となるもの
・・・生徒によって、また同じ生徒でも時期によって（経験が豊かになるに従い）自己評価に厳しくなるなど、自己評価の基準が変化することがあります。そのため、一定の基準となるもので確認をしてから評価を行うことでブレが少なくなることを期待します。
- 教員にとって
どのような時に生徒は伸びるかなど、指導案を練るときの参考となるもの

<本年度制作するビデオ>

本年度のビデオは、WWLの学びを3年間経験した、以下の2チームになりました。

- **Global Youth Fair “SURBIVE!” 実行委員会の生徒**（IMコース）
全国高校生フォーラム（文部科学省主催）文部科学大臣賞受賞チーム
WWLの3年間の学びの集大成として生徒たちの力で実施計画を立て、運営した
- **ポンズチーム “廃棄苗を子供たちの教育のツールにすること”**（IGコース）
CHANGE MAKER U-18 未来を変える高校生日本一決定戦（テレビ東京・電通主催）
農林水産省大臣官房技術総括審議官賞（優勝）

<参考：昨年までに制作のビデオ>

○活躍する生徒の記録・・・将来の目標として後輩が活用、または、自己評価の基準とできるように開発を進めているビデオ

[2020年度立命館宇治高等学校 WAKKA グループラオス支援プロジェクト](#)

[2020年度愛媛県立三崎高等学校せんたん部地域創生プロジェクト](#)

[2020年度福岡雙葉高等学校日田杉を用いた”かしつ木”プロジェクト](#)

[2019-2020 立命館宇治らおにんラオス支援プロジェクトとWWL AL ネットワーク](#)

○YouTube 立命館宇治チャンネル・・・研修報告・全国高校生SR サミット FOCUS 募集動画など

[YouTube 立命館宇治チャンネル](#)

本年分については、本校 Web ページから WWL の特集ページへお進みください